

[ジョイント]

October 2009

No.2

【特集】アジアにおける  
伝統文書の行方

時代は大きな転換期を迎え、歴史を見つめ直すことで未来社会のビジョンをさぐる動きが盛んである。伝統とは何か、文化とは？ 人は何を拠り所とし、どこへ行こうとしているのか。今、古文書をめぐる遙かなる旅へ――。





ラオスのある寺院にて、貝葉文献の文字を刻む若い僧。貝葉(ばいよう)とは貝多羅葉(ばいたらよう)の略称である。シュロなどヤシ科の植物の葉を用いた筆記媒体の一種で、おもに東南アジア、南アジアで利用されてきた。仏教の初期の教典も貝葉に書かれていたものが多い。あるいはこの僧も、何かの仏典を刻んでいるのであるうか。写真:『トヨタ財団30年史』(2006年発行)より。

CONTENTS

FIRST WORD ● 遠山敦子

よりどころをもって生きるために …… 2

特集: アジアにおける伝統文書の行方

座談会 in 松山

「伝統文書」とおし、人類共存への道を探る …… 5

伝統文書プログラムの変遷

古文書に人生の拠り所を求めて …… 12

— 国際助成プログラムと東南アジアプログラム

チェンマイから届いた手紙の力 …… 14

— アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題

多様性を是とする社会へ向けて …… 16

— アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承

「伝統文書」プログラムマップ …… 18

フィールドからの報告

ランテンヤオ族と伝統文書 …… 20

Relay Essay ● 石澤良昭

国境のない信頼関係の構築を …… 22

JOINT ホット・インタビュー ● 宮川敏彦

「炭の文化力」を高めるために …… 24

[温故知新] 身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」②

過去と未来をつなぐために …… 28

活動地へおじゃまします!

中学生がつくる 未来のエコカー …… 32

トヨタ財団ジャーナル …… 34

教育財団)では熱心な議論を重ねているが、その蓄積の中で、いくつか分かってきた手がある。その一つには子どもたちには自信をもたせ、自尊心を養うこと、二つには自然や本物の芸術文化に触れさせて、美しいもの、崇高なるものの存在を感じさせることなどである。

これは、一見迂遠のようであるが、家庭、学校、地域社会を営む大人たちが、そのような認識をもって将来の大人となる子どもたちを育てることが解決への第一歩であろう。そのためには、まず、大人たちが自らの生き方を見直し、身を律しなくてはなるまい。しかも、こうした啓発活動は、民間の力でおこなうことが望ましい。「くらしのいち」を豊かに

することを目標とするトヨタ財団が、その根底に横たわることとした問題にもどこまでアプローチできるのか、今後の課題でもある。

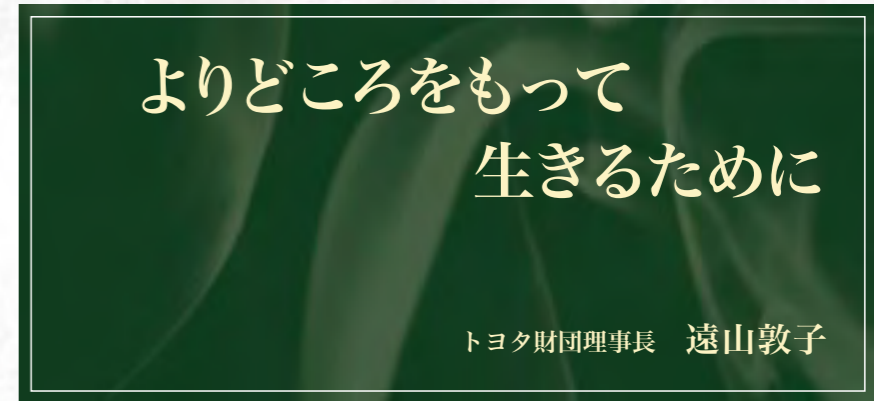
以上のことは、個人の生き方だけではなく、国にもあてはまる。自国に自信をもち、目標やビジョンを明確にもって進むことは、一国の存立にとって不可欠の姿勢である。一国の政治家たちがそのような志を持ち、国民がその気概を実践に移してこそ、はじめてこの国の未来も確かなものになると思ふ。昨今である。日本がかくあることを、国際的にも多くの国々から期待されていると考える。

人は、誰しもよりよく生きてこそ、生きる意味がある。そのため大事なこと、何らかの心の支えがあることではないか。家族でも、仲間でも、書物でも、信仰でも、趣味でも人それぞれでよい。辻井さんの場合は、ご両親の溢れるばかりの愛情をうけて、幼い時から音楽の世界を知り、厳しい訓練に耐えて見事に人々を魅了するまでの技にまで高めることができた。それに伴う揺るぎなき自信と、常に目標をもつことだという。

最近たまたま、彼、辻井伸行さんのお母さんにお会いし話を伺う機会があったが、盲目と分かった時の絶望感やその危機を乗り越えて献身的な支えの日々を過ごしてきたご苦労を、誇るでもなく、淡々と語られる様子には感心した。そのような賢母の支えがあつてこそ、あの伸びやかな演奏と豊かな人柄が育まれたのだと思つた。

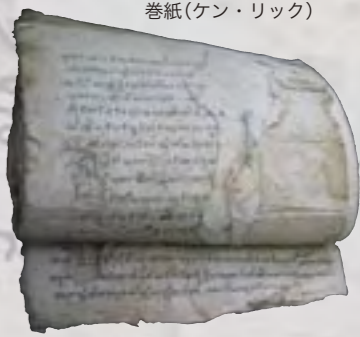
ことに憂うべき事態である。その象徴のような事件が秋葉原の無差別殺人であつた。その犯人は、誰も自分に関心を示してくれず「メールで殺人を予告したのに、誰も注目してくれなかつた」と言っているときいた。誠に手前勝手な理屈ではあるが、ここにも、よりどころをもたない孤独と絶望的な生き方があつた。

こうした状況を単に憂えるだけではなく、何とか少なくする方法はないのだろうか。そう考へて著者もかかわっている「ここを育む総合フォーラム」(パナソニック



ところで、かつては少年補導員といひ、現在は少年警察ボランティアと呼ばれる方々が、全国で非行少年の補導や、少年の健全な育成に力を注いで下さっている。その体験事例集を読んだところ、大いに啓発された。それは、問題を起した少年たちの多くは、一様に信頼できる大人と出会っていない、ということである。家庭は崩壊し、親から愛情を受けることなく過ぎたという生い立ちがほとんどである。その上、学校でも、地域社会でも誰からも本気でかまってもらつたことがない。少なくとも本人はそう思つて寂しさを紛らわしている。いわば心のうちによりどころをもたず、頼りになる人もなく、余りに孤独であり、いわんや人としての生き方の基本も身につけていない。そのことが犯罪や他者に害を及ぼす行為につながる。

最近、毎日のように耳目を覆いたくするような震撼とさせられる残酷な事件が頻繁に起きるようになってしまった。ま



巻紙(ケン・リック)

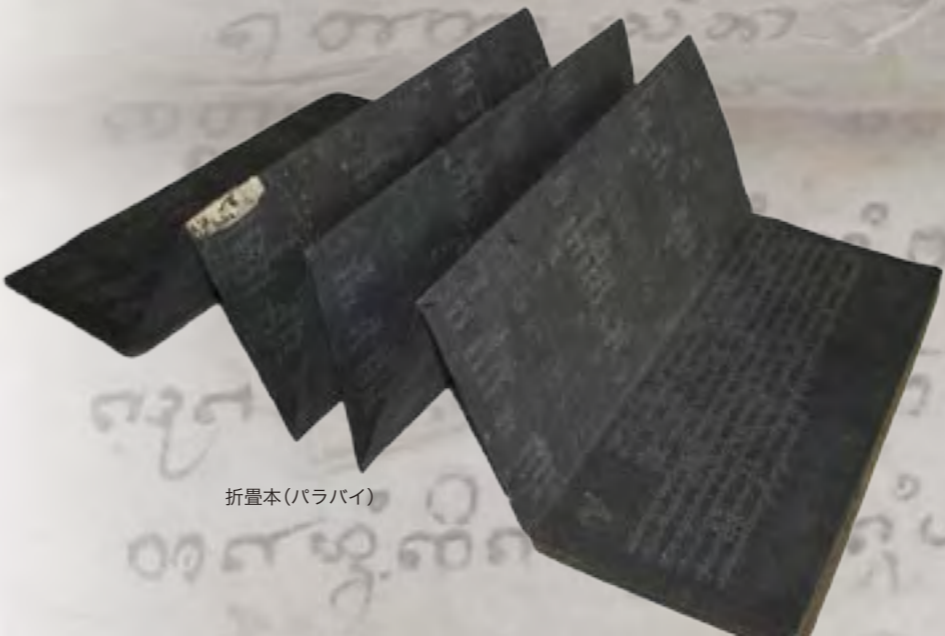
# 【特集】アジアにおける伝統文書の行方

**ト** ヨタ財団は長年にわたり、アジアにおける伝統文書の発掘や保存に関わる支援活動を行い、地道ながらも相応の成果をあげてきている。しかし、ひと口に伝統文書といっても、その形態や内容はいうまでもなく、文書を取り巻く社会的状況は多種多様であり、財団の活動のプロセスのなかで、思わぬ「問題」が浮上してきたことも確かである。

**未** 来は過去を見つめ直すことによつて開かれるという言葉もあるように、私たちも、助成活動の原点に立ち返ったうえで、今後の方向性を見定めていく時期にきているのではなからうか。

**伝** 統文書は「一見、日々の暮らしや「人間の幸せ」と無関係であるかに見える。しかし、人間と文化、そして社会の未来を考えるうえで、これほど今世界がおかれている状況と難題を集約して表現してくれる「媒体」メディア」は他にないといつてもよい。古文書たちは、現代社会という文脈において新たに読み解かれることを待っているのだ。

**本** 特集では、これまでの財団の歩みをたどりながら、広い視野のもとに、われわれ人類の姿とその進むべき道を「文書」という鏡に映し出してみたい。画家ゴッロギヤンは晩年の大作に「われわれはどこから来たのか、われわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか」という有名な題を付した。私たちはこう付け加えよう。人間は、そして伝統文書はこれからどこへ行くかとしているのか。



折畳本(バラバイ)

貝葉(ロントル)

## 特集① 座談会 in 松山

# 「伝統文書」をとおし、人類共存への道を探る



「司会権修珍(トヨタ財団プログラムオフィサー)」

### 歴史文化に対する恩に報いる

**司会** 本日はお忙しいなか、ここ松山の地にお集まりいただきありがとうございます。また、座談会のために「坂の上の雲ミュージアム」のこの気持ちのいい空間をご用意いただきまして、館長であられる松原先生にお礼を申し上げます。

さて、本誌第1号は日本国内の「地域社会」ということで特集を組みましたが、今回は国境を超えてアジアの「伝統文書」をテーマにしています。今日は文化あるいは文明という概念を含めた広い視野のもとで、自由闊達な議論ができればと思います。

まず、当財団の加藤常務理事から、ご挨拶を兼ねてお話をいただけますか。



松原正毅



菅原純



加藤広樹



伊東利勝

**加藤** このミュージアムの名にちなみ、司馬遼太郎の『坂の上の雲』のことからお話にはいたりたいと思います。

「春や昔十五万石の城下かな」  
ご存知のように長編小説『坂の上の雲』のはじめに、この子規の句が出てきます。この本は正岡子規と秋山好古、真之兄弟という松山出身の3人を主人公にして、明治という激動の時代を浮き彫りにした歴史小説の傑作です。また、スペシャルドラマとしてテレビ放映されるということも聞いております。

今の日本はまさに転換期。日本が「近代」へと向かう明治時代のエネルギーがどういったものだったかと思いをはせながら、「坂の上の雲ミュージアム」で伝統文書とそれまつわる歴史や文化のことを議論する場を

もてたことは、時期を得、地の利を得たたいへん意義のあることと深く感謝しております。

今回、私としてはできるだけみなさんの議論をしっかりと聞き取る役にまわるつもりですが、その前に財団活動と本テーマに関連すると思われる言葉をふたつほど紹介させていただきます。まずひとつは、財団の故・木村尚三郎前理事長が遺された「ふりかえれば、未来」という言葉です。不安、不透明な現代を生きるうえで、歴史と伝統に培われた土地ごとの生き方、生きる知恵、つまり文化を掘り起こし抛り所とすることで人間にとつてより豊かな未来を創りあげていこう、という意味に私は理解しています。

もうひとつは、財団をつくったトヨタ自動車の基本理念でもある「報恩(または謝恩)」

という言葉。名古屋の旧豊田紡織(株)の本社工場を改修し、現在「産業技術記念館」というミュージアム施設があります。詳細は省きますが、この記念館ができたとき(1994年6月)の記者会見で、当時の豊田英二会長はしっかりとその報恩のことに触れています。

そのときの記録を読むと、「この記念館はだれが言い出したのですか?」「トヨタ財団が考えてくれた」、「トヨタ財団をどうしてつくったのですか」「豊田佐吉は多くの人のおかげで発明、研究活動ができた。支援の大切さはよく分かっている。だから財団をつくったのです」というやり取りがある。つまり、佐吉翁の遺訓である豊田綱領の報恩の精神が、ここにも表れているのです。

私どもの財団も多領域にわたる研究・活動への助成というかたちでお役に立てることが、社会や多くの方々に対する報恩・謝恩の精神につながるのと自覚をもっています。しかしまた、伝統あるいは文化への助成といつてもその領域はひろく奥の深いものです。私たちは、長い歴史のなかで先人たちのこした業績に対する「報恩」の気持ちを忘れずに、助成活動に取り組んでいきたいと思っています。前置きが長くなりました。本題にはいつていただきたいと思っています。

### 文明と文化、そして普遍と個別

**松原** まず大枠からお話したい。文化にはいろいろな捉え方がある。私は、つきつめて考

授の西川長夫さんが指摘されているように、文化という言葉自体が近代的・国民国家的な概念であり、古代にはそういう言い方はなかったはず。文化という言葉は慎重に扱わないと、ナシヨナリズム、エスニシティを主張するために利用されかねない。結局、包摂するか、異質なものとして排除するかを目的として、他のあいだに線を引くために使用される恐れがつけねにある。今の時代は争いばかり起こるということで、違いを尊重する多文化共生、文化に優劣をつけない文化相対主義などといって折り合いをつけようとしているが、結局どうしても分けています。なかなか意図したようにはなっていないんです。

**菅原** むずかしいですね。たしかに文化にはアイデンティティの抛り所として使われる、自他を区別する線を引く手段という面があると思います。私は新疆のウイグル人のことを勉強していますけれども、彼ら、そして日本人も含め、人はあるべき文化の形とかあるべき歴史の姿というものを、言葉は悪いですが手前勝手にもっています。時にはそれゆえにさまざまな対立も起こるわけで、文化という言葉の恣意的な使い方には私も危うさを感じます。

私がここで申し上げられるのは些か話のずれた、小さな事ばかりなのですが、「伝統文書」はそうしたやや恣意的なものとは違ったところから過去を眺められる代物なのではないかと思っています。文書は歴史家が著した史書とは違い、ひとの恣意とか歴史観を反映したものではありません。そのときの必要に応じ



●加藤広樹(かとう・ひろき)  
トヨタ財団常務理事。文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員、(財)公益法人協会理事、等。名古屋大学経済学部卒、1969年にトヨタ自動車工業株式会社(現トヨタ自動車株式会社)へ入社。トヨタ・グループ13社の共同による社会貢献事業「産業技術記念館」の館長をつとめた経歴ももつ。

えたとき、人類社会を駆動させる原理として文化と文明の両輪があると考えています。文化は人が自と他を区別するための指標のようなものであり、他のものと違いますということを主張する、いふなれば異化作用がある。これは他の生物にも見て取れることです。逆に、文明にはある意味で同化作用がある。

文明と文化はどっちが大事か、そういった議論ではありません。トヨタ財団の伝統文書プログラムは、それぞれの社会の文化すなわち、個別性を尊重し生かそうという意図と、それを表現する普遍的な人の営みを支援する性質をもっている。伝統文書は正しくは伝承文書といったほうがよいのではないかと私は考えていますが、伝承ということ、他の生物社会のなかにもあります。ただ、人類社会に特徴的なのは、伝承を言語を用いて行つて

て、たとえば売買、遺産相続、係争のために書き起こされたものがほとんどで、こういう文書をのこしていくことは、「あるべき歴史」とはいくぶん違った歴史を掘り起こしうる可能性を持っています。

実例でお話しますと、私たちがトヨタ財団の助成研究で取り組んだのはイスラーム聖者廟(マザール)文書です。マザールは人々の信仰・人的交流の拠点として、歴史的にも、また現在の地域社会を理解するうえでもきわめて興味深い施設でして、そこで保持された文書は、マザールを軸とする社会がどんな形をしていたのか知るために有効な情報を提供してくれそうです。

しかしここ数年、政府は文化施設や観光拠点としてこの聖者廟を位置付け利用しようとしておりまして、地域社会の中でマザールの

いること。これがもつとも重要な点です。現

生人類は現在、世界人口で約65億人ですが、もとをたどればおよそ20万年前にアフリカ大陸の一角に現れた数百人に満たない集団から生じたということが定説です。つまり、この20万年前に現れた現生人類の最大の特徴は言語を有し運用してきたという点なのです。では、言語運用をすることでいっただいヒトに何が起こったか。他の生物社会と何が違ったのか。一言でいうと、この言語を用いた伝承により、圧倒的な量の「知」の蓄積が起こる。

いうまでもなく「文書」は言葉の記録ですから、この伝統文書プログラムはまさに人類20万年の歴史を背負っていることになる(笑)。文字が発明されるのは非常に新しい、数千年前のことで、これも革命的なことだつたわけですが、私が言いたいのは、オーラルな口承によるものであれ文字によるものであれ、言語の運用がすべての基盤にあるということ。だから、「文書」はすべて20万年の歴史を背負って成立しているといつて決して過言ではない。大づかみではあるけれど、まずこのことの認識をわれわれプログラムに携わる人間はもつておく必要があります。

**司会** それでは、このプログラム運営の考え方として、伊東先生、菅原先生の研究や現地での経験をまじえながら、さらに掘り下げたお話をうかがいたい。「文化」という言葉についてはいかがでしょうか。

**伊東** 文化についての捉え方は、基本的に松原先生と同じです。ただ、立命館大学名誉教

役割がかなり変わってきているんです。同時にマザール文書も他の「伝統文書」と同様に喪失の危機に直面しています。そういう事情もあり、マザール文書に限らずできるだけ多くの文書を収集し写真にとつて、複製を作っておきたい。可能なら出版して、できる限り長い寿命を担保するようにしたいのです。

実のところ、人々に文書が文化財として重要だという意識があればよいのですが、そういう感覚はないようです。結局、それは捨てられるか古物商に売り払われる運命にあります。90年代以降、こうした文書の一部は骨董市場に生まれ、観光客や一部の好事家相手の商売の道具になっているのが現状なのです。

**伊東** 文化が急激に変容するときに、たとえば器物なんかだと愛着があつて、保護しようという動きが出る。文書はどうですか。

**菅原** 文書に関しては、そういう動きはほとんどありません。まず文書に書かれている内容を読める人が少ないのです。現代のウイグル語と文書で使われるチャガタイ語とは正書法も違いますし、手書きの古風な書体は読むのに一定の慣れが必要です。文書を商う古物商でさえ、文書を「古い紙」とだけ呼んで、書いてある内容には無頓着なのです。

**伊東** 人々に、昔の人が残したものを読もうという意識はあまりない?

**菅原** 証文であつて読み物ではないですからね。古いものというだけでは読みたいという意識は出てこないでしょう。そもそも古い証文は49年から50年代にかけての「革命」でネ

●松原正義(まつはら・まさたけ)  
坂の上の雲ミュージアム館長。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。専門は社会人類学。とくに中央アジア、西アジアを広くフィールドとした遊牧研究。2009年度トヨタ財団アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存・活用、継承」選考委員長。



ガティブな役回りを与えられていた過去があります。借金や土地の証文をはじめとする古い文書を公開の場で焼却してしまうことは、「忌まわしい旧社会」を清算する象徴的な革命の儀式だったわけで、たとえば革命を記録した宣伝映画などには文書焼却の場面はよく登場するようです。こうした事情もあって、大変素朴なレヴェルでは、文書は価値あるもの、持っていて得なものとさえ思われていないように思います。

### 人類共通の遺産としての文書

**司会** みなさんはそれぞれのフィールドにおいて、古文書の発見や保存に取り組んでいらっしゃる。問題は、その地域に暮らしている人々が文書に対して価値を見出そうと考えているのかどうか。今お話にあったように、もし考えていないのであれば、どのようにしてその重要性を伝えたらよいのでしょうか。

**松原** どこの世界でも、古文書がはじめから大事に扱われているところはそれほど多くありません。文書としてのこっている場合でも、偶然的な条件が組み合わさって、たまたまごく一部がのこっているにすぎないし、それに、それぞれの地域で文書の「ありよう」は少しずつ異なっているのです。

極端な例を出すと、私が直接関わってきた遊牧社会には、そもそも文書というものが存在しない。ほとんど全部が、口承伝承。口承で伝えられているものしか「ありよう」がないわけです。それぞれの集団によっても

ういうものがのこされていることが大前提です。たとえば、菅原さんがマザール文書に向かわれるときも、そうではないですか？

**菅原** 率直に言って、私はまず自分の好奇心を満たすためにやっているわけです。(笑)、そんな偉いことをしている自覚はほとんどありません。しかし、われわれも現地の人もともに「人類の貴重な遺産」として文書を大切に扱っていくという意識は必要でしょうね。ともかくも文書が消滅してしまうのは何とか阻止し、誰でも手をのばせばそれに届くような状況を作り出したいと切実に思います。そのためにもまず現地の人々の理解が必要ですが、これも、そこから引き出される知見は、確かに小さな地域社会をこえて、より大きな意義を持つ可能性があります。

たとえば、新疆では革命の結果イスラーム法廷がなくなりましたが、それに先行する70年近く、イスラーム法と中国法が地域社会のなかで併存していた時期がありました。そこでの程度イスラーム法が影響力をもっていた、中国法とどのような関係を取り結んでいたのかという問題は、まさにこの時期に作成された文書が良い検討材料になります。そうした検討がひいてはイスラームと異文化の関わり合いという、すぐれて世界的、今日的な問題にも結び付けていけるのではないかと思うのです。

話はやや戻りますが、現地の人々の理解を得ること、文書という文化財への認知を促すことが、まず必要です。私たちのプロジェクトではその活動の締めくくりとしてウルムチ



●伊東利勝(いとう・としかつ)  
愛知大学文学部教授。専門は東南アジア史、とくにミャンマー経済史。2006年度研究助成特定課題「アジア周縁部における伝統文書の保存・集成・解題」プログラム助成対象者。プロジェクト名は「ミャンマー古文書パラパリの保存・集成」。

違うけど、たとえばカザフで、彼らにとつていちばん大事なのは系譜です。自分たちがどこから来たのか、誰から生まれたのか、という系譜に対する興味と関心が非常に強いのです。私が聞き歩いたなかでも、とくによく憶えている人たちは、35代くらいまで遡って憶えている。どういう憶え方をしているかというと、一番初めの始祖から兄弟が分かれて、それぞれの兄弟から誰々が生まれて……、と35代全部頭のなかにしまい込んである。いざそれを語ろうとしたら、私も聞き書きをしたことがあるけれど、ほとんど一日がかりになります。彼らは父系制の集団だから、女性の名前は出てこないにもかかわらずです。最近になってやっと、そういう記憶による伝承を文字にして印刷している。

そうになると、こんどは正統化の争いが出て

で国際会議を開催しましたが、結果としてマザールや文書というものの認知度のアップにある程度貢献できたのではないかと自負しています。ちょうど会期があの北京オリンピック前後の騒動と重なってしまっていて、開催が大いに危ぶまれたのですが、どうにか奇跡的に開催できたのは幸いです。

開催が可能になったのは、ウルムチの共催者が有能だったのはもちろん、トヨタ財団からの助成金が有効に柔軟に使えたことも大きく、それが大変ありがたかったことを強調しておきたいです。「マザール文化に関する国際会議」という横断幕が会場など3カ所でディスプレイされ、百人近い人が集い、地元メディアでも報道されました。新疆の人たちにしてみれば、マザールや文書といったものが国際的に注目されていて、賑々しく会議



●菅原純(すがわら・じゅん)  
東京外国語大学外国語学部、青山学院大学文学部非常勤講師。専門は新疆史、現代ウイグル言語文化。2005、6、7年度研究助成プログラム特定課題「アジア周縁部における伝統文書の保存・集成・解題」助成対象者。プロジェクト名は「新疆・フェルガナ両地域におけるマザール文書の調査・集成・研究」。

くる。口承伝承でしているときは、全部一気に聞くわけにはいかないし、互いを比べることはなかなかむずかしい。しかし、文字化することによってそういうことができるようになり、思わぬことで新たな争いの種になったりする。

だから大事だと思うのは、まず伝承がどのように行われ、文書が地域地域でどういうかたちで存在しているのかという点です。全体からみれば文書はごく一部の伝承記録でしかない。ほとんどが口承のかたちで伝えられるもの。文字化されることは非常に少ない。たとえば、モンゴルの元朝秘史がそうです。

口承のものは、相当意識しないと記録として残すことは不可能で、実際問題もうほとんど消えてしまったものが多い。一度失われてしまうと、今さら掘り起こすことさえできない。したがって、私は当プログラムにおいても、のこされている口承伝承、口伝で伝えられている記録もできるだけ取り込んでいく対象にすべきだと思う。どれだけががんばっても世界全体の伝承の歴史をカバーすることはできないが、やはり人類の遺産という意味で、今後できるだけ広く間口をとっていく必要があるのではないのでしょうか。

**伊東** 人類共通の遺産という視点をもつことは大切ですね。人間だれでもいろんな複雑な問題を抱えていて、それをどう解決するかという知恵を探しているときに、時間と空間を超えたところにヒントが隠されている可能性があり、どうかたちであれ記録としてそ

が開催されるほどのものなのだ、との認知が多少なりとも進んだのではないのでしょうか。  
**司会** 文書には目先の経済価値を超えて、地域や人類全体にとって大きな歴史、文化的な価値があるんだと、そう思っただんばっている研究者がいることが、地元の人々にとつてもひとつの認識に結びついたのですね。

**伊東** 大きい規模でなくても、捨てようと思つた瞬間にちよつと待てよ、と思いとどまってくれただけで活動する意味があります。文化と言ったとたんに、どうしても人は壁をつくってしまいがちですが、壁をつくりながら、同時に壁を壊していく作業が必要になるといえばよいかな。

**松原** その問題は本当に厄介。文化の定義は無数にあります。文化をつきつめていったらいずれも価値観の問題に行き着く。価値観は理屈で出てくる問題ではなく、端的に言えば好きとか嫌いに関わってくるものなので、いくら理屈を積み重ねても価値観そのものを打ち崩すことは不可能。先ほどから言っていることに通じるのですが、それぞれの文化的背景を尊重し相対化して、「好き嫌い」を超えて冷静な認識を共有すべきなんだろうと思います。そうしないと、文化といたときに壁ができ、個別的利害の対立という構図のなかに人類はとどまったままになってしまう。

トヨタ財団がいまやっている伝統文書のプログラムは、まさにそこにかかわってくることだと思う。つまり、このプログラムは、人類としての全体性と地域ごとの個別性に何と

か橋をかけようとしている試みだともいえるからです。言語は最終的には価値観と非常に強く結び付いているものですが、同時に普遍性と個別性というものの両方を指し示す機能をもっているのです。あまり文化とはなにかといった厳密な定義に拘泥せずに、むしろ多様なアプローチから、全体（普遍）と部分（個別・固有）のバランスをいかにとるべきかといった方向性を今後追求していくことが不可避なことであると考えます。

### 「存異共生」、困難ではあるが不可避な道

**司会** 考え方の指針ともなるたいへん重要なお指摘だと思います。私たちトヨタ財団もいまお話いただいた考えを共有しながら助成活動を一つづつしていきたいと思いますが、ここで今後の方向性への提案、具体的なご意見などをいただけますでしょうか。

**松原** 人は言語活動を行う動物であり、あらゆる人間の文明および文化の根幹に言葉があるということはどんなに強調してもしすぎることはない。そのためにも異文化（多文化）の言葉に対する基本的理解は必要でしょう。ひとつの言語に統一するという方向ではなく、それぞれの国なり地域の人間が理解しあえるための多言語辞書がつくれるといいなと夢想しています。

これもきわめてむずかしく時間と労力のかかることで、「完全」なものなど土台無理だとしても、構想としてそのくらい雄大なビジョンをもっておいてもいい。本当をいえば、世間が非常に大切。財団のPO（プログラムオフィサー）の方々にもできるだけ現地に رفتってもらって文書を取り巻く環境をじかに肌で感じてほしいとも思います。すでにある程度は実践されていると思いますが、現地の人や研究者、そして関心のある個人や団体とコミュニケーションをはかりながら、文書が人類の資産であるという意識を共有化するためのねばりづよい活動をつづけるということが、なんといつても基本でしょう。

**松原** やはり「共有化」がひとつのキーになりますね。その方向に向けてできる範囲で手を打つことだと思ふ。たとえばこの座談会の延長で、同じようなテーマのプロジェクトに関わっている人たち、同じような問題意識をもっている人たちが、国境や専門領域を超えてディスカッションできる場ができると思います。それこそ4、5人からはじめるのでいいと思うけど。そういう小ぶりなものをいくつか設けていったら、新しい発見とか、展開も出てくるのではないのでしょうか。そういうことを日本の民間組織であるトヨタ財団が主催して行うことにも大きな意義がある。あ

界中の6000〜8000言語の共通辞典ができてくれたらありがたい（笑）。

夢みたいな話ですが、電子辞書や携帯電話みたいなもので、たとえばこちらが日本語で話したことがパッとスワヒリ語とかに変わって、逆も可能、そうしたことができれば、平和構築にいちばん有効なツールになるのではないかと思ひます。

**菅原** 言葉をのこしていくという点というならば、辞書もさることながら、語彙の意味だけでなく、言葉を記述してのこすという視点もあつていいと思います。今、記述されていない言語は世界のなかにいくらかもある。

**伊東** いま松原先生がおっしゃっているのは人類としての知識・知恵の共有化、そのためのコミュニケーションが大事ということですよ。

**松原** そういうことです。もちろん記述することも大事。辞書づくりは、この伝統文書プログラムのひとつの構想であり目標の一例ということではあるのです。いうまでもなくその目的は、異なる文化環境にいる人々が互いに理解しあい、共存していくことの可能性を開くことです。

**伊東** そういう意味では、現代の電子機器やインターネットを利用した情報の蓄積、公開システムをトヨタ財団や個々の研究者、助成対象者に充実していったほしいとも思ひます。地球の裏側にいても、いつでも文書情報にアクセスできる体制を整えることは、このようなプログラムの場合はきわめて重要だと思います。ただ、申し添えておきますと、ア

まりお金をかけすぎると続かないので、POがまとめ役となる小さな規模のものでいい。

**司会** 結論は私たちPOにもっと働けと（笑）。

**伊東** そのとおり（笑）。日本の民間組織がここまでやるか、こういったやり方もあるかといった「範」を示してほしい。でも、そういうときに、日本の方式の威力を見よ！みたいなケチなことをいわないで、人類の誰にでも受け入れられるような普遍的なものを追求し、貢献しているんだというくらいの気持ちで取り組んだらいいと思ひます。

**松原** そう、繰り返し確認しますが、人類のもとは同じ、言語も同じ、ひとつだった。ダーウィンを持ち出すまでもなく、民族の間に種の違いなどない。人類はひとつの種であることにおいて共通の分母を有しているという意識を、皆がもつべきだと思う。そうしないと、9・11同時多発テロ以降急速に表面化した、世界がかかえるアポリア（難題）の根本的解決は永久にできないということですよ。日本人がかアメリカ人がとかいって、自文化を力づくで他者に押し付けているかぎりは無理です。

クセス数が多ければいいという問題ではありませんが、多いに越したことはありませんが、むしろ数よりは、いつでもどこからでもアクセスできる状態が定常的にあるということが大事なことですよ。アクセス数が少ないからダメだということになつてしまうと、市場原理による淘汰競争になつてしまい、このプログラムの趣旨に逆行することになつてしまう。また、このプログラム自体「尻切れトンボ」で終らせず、いかに持続していくかが重要なポイントになります。

**菅原** 同感です。ウェブ上はかなり資産はありますが、コンテンツの持続性という点では、いまひとつ心もとなさがあります。現在の流れとしては現存するウェブ・コンテンツを可能な限り蓄積していこうという大きなアーカイブ構築の動きがありますけれども、組織が自分たちの責任の持てる範囲で半ば永続的にコンテンツを蓄積公開していく、というのは大いにやっていただきたい。ただ、私は個人的には、これまでどおりに印刷物を数百部刷つて配布し、それを保管してもらうという地道な手法が今なお最も確実なやり方だとも思ひますけれども。

**伊東** 技術的な方法は他にもいろいろあるし、保存、公開の仕方ひとつに限定しないで組み合わせるやり方を考えていい。文書によつて形態も内容も量も異なるのだから、それぞれの文書に適したやり方を、当該地域の政治的条件も勘案してベストな方法を探りするしかありません。

そのためにも、現地・現場の感覚をつかむ

それぞれが互いに多言語、多文化として認め合いながら同時に人類としての普遍項を探っていく。私の造語ですが「存異共生」ということにしか人類の危機を回避する道はないでしょう。大袈裟に響くかもしれませんが、伝統文書プログラムの今後の展開に関しても、そのような広い視野に立ち、未来の地平を見据えながら取り組んでいく必要がある。なにも一発勝負の大掛かりなことをやるべきといっているわけではありません。そんなことは失敗するに決まっています。異なる部分のこしながら、共存していくための小さな一歩でいいのです。みなさんがいうように、さまざまな局面における交流とコミュニケーション、継続していくという意思と努力がなによりも肝要。それが、最終的に全体性と個別性のバランスをとるためのコアになつていくはずですよ。

**加藤** 道は遠く、困難だけど、避けては通れない道であると拝聴いたしました。

**司会** 話はずきませんが、本日はここまでにしたいと思ひます。有益なお話をありがとうございました。



# 古文書に人生の拠り所を求めて

## 国際助成プログラムと東南アジアプログラム

● 姫本由美子(トヨタ財団チーフプログラムオフィサー)

**私** たちのルーツや歴史を知ろうとするとときに、何がかりの一つになるものとして、古文書をあげることができましょう。古文書と一口にいつても、アジアではその形はさまざまです。もちろん一般的には紙に書かれたものですが、同じ紙でも厚紙を折り畳み、そこに墨を塗ってその上に滑石で文字を書いたパラバイと呼ばれる古文書もあります。紙のほかに、ヤシ科シロ属の植物の葉に鉄筆で文字を彫りこみ、染料を刷り込んだ貝葉ばいようと呼ばれる古文書も多く見られます。

それらの文書が所蔵され、保管されている場所もさまざまです。王家、寺院や石窟、イスラーム寄宿塾等に保管されていたり、民家に所蔵されていたりする古文書もあれば、すでに博物館、図書館、古文書館や大学の研究所などに寄託されている古文書もあります。

そこに書かれている内容も多種多様で幅広い分野にわたります。經典や祭祀儀礼、慣習法や法典そして裁判所の記録、中央・地方の行政文書、個人の貸借・売買関係文書、伝統医療、占星術、そして文学など、宗教ならびに国家行政から一般の人々の生活全般にまで及んでいます。

さて、トヨタ財団では設立以来こうした古文書の保存の支援にかかわってきました。最初に助成が行われる「タイ北部地方のラーンナー・タイ貝葉の調査とマイクロフィルム化」プロジェクトを助成することにしたのです。ソンマリー助教授らは、3年間に300以上の寺院をめぐる、22万点の貝葉を閲覧し、そのうちの約7800点をマイクロフィルムにおさめたのです。

北タイで始まった貝葉を調査保存するプロジェクトは、ソンマリー助教授のグループや財団のプログラムオフィサーのつぎまざまな人とのつながりを通して、その後東北タイ、中部タイ、南タイへと飛び火していきました。さらに、1988年からラオスで、そして2000年からミャンマー(ビルマ)へと、同様の人のネットワークを通して、東南アジア大陸部の他の地域へも広がっていくことになりました。

東南アジアの島嶼部とうしよでも、古文書関連のプロジェクトへの助成を行っています。インドネシアジャワのスンダ地方の古文書は同地方の歴史を知る上で貴重な資料ですが、インドネシア国立図書館やスンダ地方の博物館だけでなく、フランスやオランダの大学や研究機関にも所蔵されています。また、貴族の子孫、宗教指導者や伝統的な社会指導者が個人で所蔵しているものも多くあります。それらは貝葉であるものもありますが、多くは紙に書かれたものです。1980年から2年間、これらのさまざまな場所に保管されているスンダ古文書のインヴェントリー(目録)作りに対して助成しました。その中心となったのはバンドウンのパジャジャラン大学文化研究所のエディ・エカジャティ副所長でした。

同じ島嶼部のフィリピンでも、1990年から数年間、アテネオ・デ・マニラ大学ロヨラ神学校に在籍するホセ・マリオ・フランシスコ神父が行った「フィリピン研究のための固有の資料」プロジェクトを助成しています。フィリピンの歴史研究に使われる資料は、

たのは、海外での助成を担う国際助成プログラム(のちに東南アジアプログラムと改称)においてです。国際助成プログラムでは、日本と歴史的に関係の深い東南アジア地域に焦点をしぼり、かつ、同地域で経済開発、医療や人口問題などに力を入れるアメリカの財団などの棲み分けを考えて、文化の分野での助成活動にプライオリティをおくこととしました。当時東南アジアでは、西欧についての研究が主流でしたが、開発のなかで揺らいでいく自国のアイデンティティを模索する自国研究への確かなニーズも存在していました。そのため東南アジアの人々の主体性を尊重して、「固有文化の保存と振興」をテーマに掲げて東南アジアの人々が行うプロジェクトへ助成を行うこととしたのです。その「固有文化」の柱の一つになったのが古文書でした。

**古** 文書への助成の契機となったのは、1977年に大阪の国立民族学博物館で開催されたセミナーで、タイのチェンマイ大学社会科学研究所のソンマリー・プレミアムチット助教授が行った報告にありました。寺院などに保存されている貝葉が、学術的な重要性に気づかれることなく散逸の危機に瀕している状況を伝える報告を聞いた日本の研究者の仲介で、1979年ソンマリー助教授らが中心となって実施す

ほとんどがスペイン語や英語で書かれたものであるのに対し、各所に散らばって保存されているフィリピンの言語で書かれた資料を発掘し、活字にして部分的に出版することによって、フィリピン史をより包括的に研究してもらうことを目的としたものでした。

**国** 際助成では、古文書の発掘、インヴェントリー作り、マイクロフィルム撮影などを助成しただけではありません。集成した古文書を読むための辞書作り、それらの古文書を活用した歴史研究へも多くの助成を行いました。東南アジアを対象とした国際助成は、地域的により広いアジアを対象としたプログラムへの展開を図るため、2004年に閉じることとなりましたが、1979年にチェンマイで助成を開始して以来四半世紀にわたって、約200件の古文書関連のプロジェクトへの助成を行いました。

さらに、国際助成を閉じるにあたって、古文書保存を助成する精神を引き継ぐ受け皿として、2005年度より、研究助成の特定課題として「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」を設けました。中華文明とインド文明のはざまにあるような各地で、貝葉文書をはじめとする地方かたの伝統文書を保存、集成し、解題を付すプロジェクトへの助成を行うものです。

**こ** のように国際助成の開始以来、古文書の保存への助成を途絶えることなく行ってきましたが、それにはどのような意図が込められているのでしょうか。先にも述べましたが、国際助成で「固有文化の保存と振興」をテーマとして掲げた背景には、開発が進むなかで揺らいでいく自国のアイデンティティを確かなものとしたいという東南アジアの人々の切実な思いが存在していました。やはり開発が進むなかで古文書も消滅の危機に晒されており、人々のアイデンティティと古文書はまさに表裏一体の関係にあるといえま



ラオスの寺院における、貝葉文献の解読と分類作業

ラオスの保管庫(パゴダ)の外観 [1992]



ラオス、ピエンチャンの寺院に所蔵された貝葉文献 [1992]

しよう。その古文書を探し出し、それをしっかりと保存し活用していくことは、東南アジアの人々の文化的な拠り所を確保することにつながるというのです。

しかも、助成対象となつてゐる古文書は、地方に散逸している地方文書が大半です。アジアの多くの歴史は、現在の国家を単位として書かれたものが中心ですが、このような古文書を資料として地方史が書かれることよつて、多様でより豊かな私たちの歴史を手に入れることができるでしょう。また、中央の行政文書などに依拠して書かれた国史に地方や少数民族の古文書に書かれた視点を加えることよつて、中央中心の国

史が再構築されたり、一国史観を超えた地域史が書かれたりする可能性を秘めています。さらに、植民地の経験のあるアジアの多くの国々にとつて、往々にして植民地文書に依拠して書かれた歴史を、地方文書がより内在的な視点を持つた歴史への再構築を行うことには大きな役割を果たしてくれることが期待されます。しかもそこには、歴史のみに限らず伝統に培われたより普遍的な人類の知恵が盛り込まれています。古文書は、まさに私たち人類の拠り所を確かにし、人生を豊かなものにしてくれる魔法の泉であり鏡であるといえましょう。

# チェンマイから届いた手紙の力

## アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題

●本多史朗(トヨタ財団チーフプログラムオフィサー)

**そ**れまで伝統文書の保存を支援してきた枠組みであつた東南アジアプログラムは2004年にその幕を閉じることになりました。当時、財団の運営に携わつてきた人たちは、どのような後継の助成プログラムを作るのかを話し合つていました。

その年の夏、財団宛てにチェンマイ在住の日本人歴史学者から、一通の手紙が舞い込んできました。この歴史学者はラオスで外交官として若き日をすごし、その後チェンマイ大学でラオス史を専攻していました。手紙の内容は、「トヨタ財団が営々と行つてきた東南アジア研究への支援を打ち切るのはあまりにも惜しい。とくにラオス研究の振興については、重要な一次史料

である貝葉文書の保存を通して、多大な貢献をなした。なんとか継続できないか」というものです。その年の秋に、彼は財団に招かれ、その主張を直接話すこととなりしました。「トヨタ財団の東南アジアへのかかわりを通じてほしい」という彼の情理を尽くした訴えを聞いて、心動かされた関係者は、それまでの東南アジアプログラムの流れの中から、伝統文書の保存に関する部分を取り出して、独立した助成プログラムとして運営することを決めました。

これが、「特定課題：アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」です。ただし、助成金の総額は2000万円と小ぶりです。このため、小型の助成も感謝とともに記しておかなければなりません。結局、初年度にあたる2005年度には、中国(貴州、新疆、内蒙古)、インド(オリッサ)、ラオス、ミャンマー、ウズベキスタンといった国、地域の伝統文書の保存プロジェクトに助成することとなりました。アジアの大文明の周縁部に存在する、ともすれば忘れ去られそうな伝統文書の保存を支援するという、狙いに即した選考結果だつたといえるでしょう。

プログラムに冠せられる「特定課題」という名称が頭についています。また、東南アジアという地域名に代えてアジア周縁部という耳慣れない地域名がその名称に入つてゐます。その心は、アジアの大文明の中心である中国とインドの周縁部にある地域に関連する伝統文書の保存を特に支援しようというものです。たとえば、中国とインドに挟まれた、ラオス、ミャンマー、あるいは中国やインド国内にあつても、メインストリームではない少数民族が多く居住する雲南やアッサムという地域がイメージされてゐました。中央アジアもそうです。このような国や地域では、大体において伝統文書を体系的に保存していくような余裕が、政府にない場合が多いのです。

**読**者の方も不思議に思われるでしょうが、東南アジアプログラムが消えていくなかで、なぜ伝統文書の部分が、このような形で生き残ることができたのでしょうか。それは、まず理論的なやりすたりの激しい研究に比べて伝統文書の保存は、それに関連する歴史研究を促すこととなり、目立たない形であつても後世に永続的な影響を与えることができること、また、地道に文書を集集し、保存と解説作業を続けていけば、成果が出やすいこと——これに比べれば研究というものは個人の資質によるところが多く、途中で頓挫することもよくあります——、さらには解説作業の過程で、伝統文書の背景やその地域独特の語彙に詳しい土地の古老や僧職者も巻き込まれていくため、社会への広がりも期待できることが挙げられると思ひます。

「特定課題：アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」は、2005年4月に公募を開始することとなります。この立ち上げまでの過程では、東南アジアや中央アジアに詳しい東洋史専攻の歴史家の方々が、それぞれ多忙な中で相談に乗つてくださったこと

「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」のあり方が静態的に見えます。単なる地域史、郷土史研究への貢献にとどまらず、伝統文書の保存が社会へ直に引き起こすポジティブなインパクト——地域の住民の心の拠り所であるアイデンティティの強化などがその例でしょう——を重視する方向にプログラム



村に住むイスラーム聖職者の家に保管されていた、ヴェトナム、ファンランのチャムの古文書。クルアーン(コーラン)のチャム語訳 [1998]



チャム文化センターに展示してある、ヴェトナム、ファンランのチャムの古文書 [1998]

バリ島のグドゥン・クルティア(ロンタル文書博物館)で行われた貝葉(ロンタル)の複製作業 [1997]



運営の舵が切られていきます。地域の文化財あるいは資源としての伝統文書を守り、さらにそれをどのような生かしていくのかを重く見るようになったといえます。これに併せて、対象とする地域も、大文明の周縁部に限ることなく、アジア全域を視野に入れようという広がりが生まれてきました。

保存するとともに、その活用と世代を超えた継承を積極的に狙うというメッセージが打ち出された「特定課題」アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」へとリニューアルされることとなります。

チェンマイから配達された一通の手紙の力により甦った伝統文書保存のプログラムは、今また新しい段階への飛躍を行おうとしています。

# 多様性を是とする社会へ向けて

## アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承

●楠田健太(トヨタ財団プログラムオフィサー)

**ト** ヨタ財団は、設立直後の1970年代後半から四半世紀にわたって「国際助成」次いで「東南アジアプログラム」という枠組みで、アジア地域の文化保存への支援を積極的に行ってきました。その系譜を受け継ぐ形で、2005年度に4年間の時限付きプログラムとして発足した特定課題「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」は、今年度より「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」としてリニューアルされることとなりました。本稿では、今回のリニューアルに伴う具体的な変更点やその背景、今後の展望などを概観したいと思います。

**ま** ず変更の一点目は、助成の対象となる地域を、アジア周縁部からアジア全域へと拡大したことが挙げられます。そもそもアジア周縁部とは緩やかな概念であり、対象地域が属する国家や文化圏の大小を

問うものではないのですが、「周縁部」という言葉を用いると、どうしても地理的な辺境というイメージが強調されてしまいます。そうではなく、アジア各地域にあまねく存在する文書群を、その重要度に応じて出来る限り偏りのない目で見つめていきたいというのがその狙いです。

二点目は、「伝統文書」の概念をより広義に捉えた点です。これまで伝統文書とは、宗教、祭祀儀礼、行政記録、慣習法、医療技術など当該地域の人々の世界観を示す雑多な事柄が記された文書を想定していたのですが、今年度からはこうしたいわゆる「伝統的」なものに留まらず、個人的な書簡のやり取りや古地図なども含め、紙の上に人の手によって書かれたもの全般を対象とすることとなりました。これまで応募者の方々からいただいた多数の企画書から、保存を要する

文書にはさまざまな形態があることが窺えます。そうした状況下で、財団側から対象について極力限定を加えるべきではないと判断したためです。

三点目は、タイトルからも分かる通り、伝統文書の「保存、集成、解題」から「保存、活用、継承」へと軸足を移したことです。本プログラムは、昨年度までは研究助成プログラムでの特定課題という位置づけであり、文書群を収集してその一部(もしくは全部)に解題を付す、というプロセスが一般的な流れで、学術研究的な側面が大きなウェイトを占めていました。今年度からは、その重要性はもちろん維持しつつも、アジア地域の実践的な活動プロジェクトを支援する「アジア隣人プログラム」の特定課題へと移行し、「活用、継承」を加えることで、その成果をより広く社会に共有化し、末長く受け継いでいきたいという思いを反映しています。

**さ** て、これらのリニューアルを受け、今年度は昨年度の倍以上にあたる74件の応募をいただきました。アジア各地域の専門家、および文化財の保存修復の専門家からなる選考委員による厳正な審査の結果、11件(助成総額3000万円)のプロジェクトが採択となりました。今回の選考過程において見えてきた課題は次のとおりです。

昨年度から今年度にかけて、伝統文書概念を広げたことは前述のとおりですが、それでもまだ不十分であるという意見もいただいています。「人の手による書きもの全般」を今回の伝統文書の対象として設定したわけですが、それでは石に刻まれた碑文はどうなるのか、書きものではない印刷物は対象とならないのか、決して紙の上には残らないオーラル・ヒストリーは……。「文化の保存」という観点から考えたとき、その範囲が従来の「伝統文書」という枠組みでは捉えき

れないことは明らかです。一方で、トヨタ財団には「研究助成プログラム」「アジア隣人プログラム」「地域社会プログラム」という大きな公募プログラムがありますが、それぞれの趣旨や対象は違えど、文化領域への支援を軽視しているプログラムはありません。そのようななか、この伝統文書プログラムではどこまで助成の対象とするのか、財団全体の方向性や他プログラムとの兼ね合いを考慮した上で、より明確にしていく必要があるでしょう。

**も** う一つの課題は、軽々に「伝統」という言葉を用いてしまうことの危惧です。本プログラムによつて、当該地域に死蔵されていた文書が日の目を見、結果として地元の人々が自らの地域に誇りを持つことができたとするなら素晴らしいことです。しかしそれが、過度に誤った形で表出されると、自文化の優位性を声高に主張する排外的なエスノセントリズムにつながりかねません。担当者自身は、文化というものは、その発生の時点から混雑性・雑種性を本質的に孕んだ概念であり、したがって固定化された静的なものではなく、刻一刻と変化してゆくダイナミズムのなかで捉えることが必要だと考えています。今後はその成果が当該地域の中だけに籠もるのではなく、それがいかに外に対しても建設的なインパクトを与え、多様性を是とする社会を構築できるのか、という視点から、個々の文書の活用や継承のあり方を深めていくことが求められるでしょう。

現在、消滅の危機に瀕している文書はほぼ無限に存在します。限りあるリソースの中で、トヨタ財団がどのような膨大な文書群に対してどのように関わっていくのか。常に試行錯誤ではありますが、今後もうした問題意識を常に念頭に置き、地域の人々とともにによりよい助成活動を模索していきたいと思えます。

折畳本(バラバイ)の補修作業



\*



\*

ミャンマー、サーリンチー県の虫食いや劣化の進んだ折畳本(バラバイ) [2007]

ミャンマー、タウンドウィンチー県における現地での文書撮影の様子 [2004]



\*

\*写真提供: 伊東利勝

# 「伝統文書」プログラムマップ

トヨタ財団は1979年以來、伝統文書の保存等に関わる数多くのプロジェクトに助成してきました。このマップは、トヨタ財団が2005~2008年度まで実施してきた研究助成プログラム「特定課題：アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」と、2009年度からはじまるアジア隣人プログラム「特定課題：アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」の助成対象プロジェクトを示したものです。

\*地図上の丸数字は、表の各プロジェクトの活動拠点に対応させていますが、実際の活動範囲は複数の地域をまたいだ広範囲に渡る場合があります。  
\*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

## 2005~2008

### 「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」において助成されたプロジェクト一覧

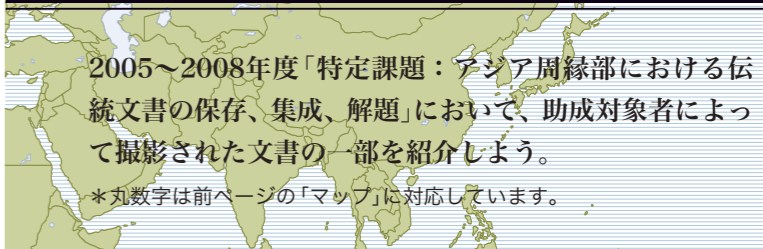
[2]は助成期間が2年間であることを示す。その他は1年

No.	題目	活動拠点	年度
①	新疆民間のモンゴル語伝統文書の保存と集成—イリ地方のオイラド=モンゴル人を中心に	中国	07[2]
②	シルクロード草原の道における仏教遺跡(石窟)出土モンゴル語の古文書の保存と解題	中国	05,06,07
③	新疆・フェルガナ両地域におけるマザール文書の調査・集成・研究	中国・ウズベキスタン	05,06,07
④	貴州省苗族民間文書の調査と保存プロジェクト	中国	05[2]
⑤	「指路経」を中心とする雲南省彝族經典の収集・保存・分類とデータベースの作成—雲南省彝族經典文化の伝承機能復興のための基礎的研究	中国	06[2],08
⑥	中国雲南省中国思茅地域におけるタイ族文書の収集と保存	中国	07[2]
⑦	中国雲南省西北部に伝わる白族言語漢字表記文書の調査と収集・整理および保存	中国	08[2]
⑧	フィリピン、ミンダナオ島南ラオ州の民衆イスラーム書の保存と集成	フィリピン	08[2]
⑨	タノ・アベ宗教塾(インドネシア・アチェ)所蔵写本の調査ならびにカタログ化	インドネシア	06[2]
⑩	ヴェトナム・フエ都城周辺集落の伝統民間文書とその文化的脈絡の包括的収集と保存	ヴェトナム	08[2]
⑪	北部ラオスにおける解題付タイ・ナー文書目録作成	ラオス	05,06,08
⑫	ラオ千年王国文学：保存、翻字、翻訳	ラオス	05[2],07
⑬	ラオス北部のランデンヤオ族民間伝統文書の保存・集成・解題	ラオス	08[2]
⑭	ミャンマー古文書バラバイの保存・集成	ミャンマー	06[2]
⑮	ミャンマー、カレン族の伝統文書の保存、目録、翻字	ミャンマー	06
⑯	11~19世紀ミャンマー伝統文書ダマセットおよび法律的写本の目録作成・翻字・翻訳・保存	ミャンマー	06,07
⑰	ミャンマーにおける古代のモン族の貝葉及び文書の保存・集成・解題	ミャンマー	06,07,08
⑱	ミャンマーの貝葉およびバラバイの保存管理—特にシャンとモンの文書に関して	ミャンマー	06[2]
⑲	ミャンマーのバラバイ文書の調査、デジタル化、目録作成	ミャンマー	08
⑳	東部インド・オリッサ州丘陵地域における伝統文書の目録化と収集・保存・編纂プロジェクト	インド	05,06,07
㉑	ウズベキスタン共和国におけるイスラーム法廷文書の収集・保存・目録化	ウズベキスタン	05,07[2]
㉒	民家の物置からインド洋を眺める—イエメン、ハドラマウト地方における民間文書の保存、公開	イエメン	07[2]

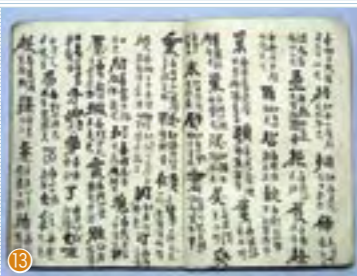
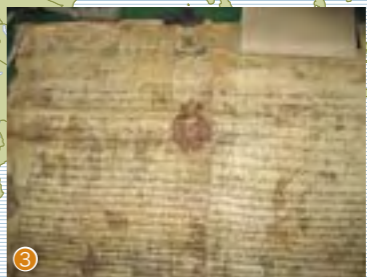
## 2009

### 「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」において助成されるプロジェクト一覧

No.	題目	活動拠点	年度
①	韓国黄海岸における近世・近代海村文書の歴史生態学—忠清南道洪城郡星湖里文書の整理・解題	韓国	09
②	韓国済州島の伝統文書の調査・集成・保存	韓国	09
③	遊牧民が描いた郷土の景観—モンゴル古地図のデジタル保存とデータベース・WEBサイトによるその利用と継承	モンゴル	09
④	イラン・中国・日本共同によるアルダビール文書を中心としたモンゴル帝国期多言語複合官文書の史料集成—多民族・多言語社会の構造と官文書上のペルシア語・アラビア語・トルコ語・モンゴル語・漢語の相互関係の解明を目的として	イラン	09
⑤	内モンゴル西部地域における民間の土地契約文書の調査・保存・解題	中国	09
⑥	中国湖南省藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承	中国	09
⑦	貴州省モン族の混農林業契約に関する清水江文書群の目録作成、翻字、解題、および集成	中国	09
⑧	バリ島に残存するヒンドゥー法典「アウイグ・アウイグ」の収集・整理と保存・継承—伝統文書の比較歴史社会的解読と再定位の試み	インドネシア	09
⑨	インドネシアにおける平和なイスラームの創出—デジタル化、マイクロフィルム化、翻字、翻訳、文脈づけを通じたナスカ・ランバン(ランバン文書)の保存	インドネシア	09
⑩	南インドからスリランカへの民族移動の複合的説明を含む、国と地域の地理(地誌)に関する貝葉文書の収集、翻字、および翻訳	スリランカ	09
⑪	エジプト西部砂漠・オアシス地方における地方文書の収集	エジプト	09



2005～2008年度「特定課題：アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」において、助成対象者によって撮影された文書の一部を紹介しよう。  
\*丸数字は前ページの「マップ」に対応しています。



① オイラドの高僧ザヤ・パンディタ訳オイラド・モンゴル語(トド文字)版「大乘無量寿経」木版本の最終葉。(撮影：井上 治)

② カーシュガルの某聖者廟に対し同市の執政官(ハーキム)が発給した寄進状(ワクフ・ナーメ)。言語はチャガタイ・トルコ語。(撮影：菅原 純)

③ 中国・雲南省彝族の独特の宗教文化を伝える「指路経」(「死者の書」)。写真は経典「百楽書」の一部。(撮影：藤川信夫)

④ ジャウィ表記マレー語で書かれたイスラーム神秘主義教本。(撮影：川島 緑)

⑤ ラオス国ルアンナムター県にて撮影された、ランテンヤオ族による漢字辞書。左の記事参照。(撮影：富田晋介)

⑥ ウズベキスタン共和国のブハラ文書。(撮影：堀川 徹)

特集③ フィールドからの報告

# ランテンヤオ族と伝統文書

●富田晋介(2008年度「伝統文書」プログラム助成対象者)

## ランテンヤオ族との出会い

中国国境から山道を車で一時間ほどの盆地の真ん中に位置する村で、タイ語やラオス語に近い言葉話す民族が暮らしている。その

周辺には、彼らとは違ったチベットやビルマ系の言語やカンボジア系の言語を話す、さまざまな少数民族の村が散在しているような場所である。

この村で、村人に水田の開拓史や売買履歴

も同じ文字を使っているよ」といって自分の姓である「李」と書いてくれた。彼は、タイ系の人ではなくて、ラーオ・ファイであるという。ラーオ・ファイとは、ラオスでのランテンヤオ族の呼び名である。そして、自宅には、漢字でかかれた文書がたくさんあるという。当初の目的とは異なるが、時間もあることだし見に行ってみようかということになった。彼の自宅に招かれることになった。

## 漢文文書と伝統文書プロジェクト

このような経緯で、ランテンヤオ族の漢

文文書に触れることになった。彼の家の片隅におかれた木箱を開けると、ラオス文字による最近の文書に加えて、紙がぼろぼろになった、漢字で書かれた本が積み重なっていた。どうしてこんなに持っているのか不思議に思っ彼に素性をたずねてみると、彼はランテンヤオ族が日常的に行っている、祖霊を祀る儀礼の祭司であるということだった。そして、これらの本のほとんどは、その儀礼に使うという。

① ランテンヤオ族の女性。藍染めの綿で織った民族衣装を着、成人女性は両方の眉毛をすべてぬいている。手前にはブタの餌にするバナナの偽茎とカボチャがころがる。2009年8月  
② チガヤでつくった家が多かったが、最近ではトタン屋根を使った家が増えている。村の中には、ココヤシなどの有用樹種が植えられている。また、手前の川は、水浴びの他にも藍染めに利用されている。2009年8月  
③ 文書の撮影風景。一眼レフデジタルカメラとパソコンをつなぎ、パソコン画面で写真を確認しながら撮影している。2009年3月

写真撮影：富田晋介

ランテンヤオ族が彼らの古い伝統をすて、新しい習慣を受け入れることで、順調にラーオ族社会に溶け込んでいるようにみえるが、そう単純ではない。儀礼は、家族の結束や地域社会の秩序を確認する装置であり、文書はそのためのかせない道具なのである。よって、これらが失われるということは、地域社会の崩壊を意味するのかもしれない。

## 文書の写真撮影

文書は、普段利用されているものであるために、長期間借り出して町のコピー屋さんでコ

を聞いていると、同じ年に同じ人から水田を買った人が数人いることがわかった。そして、その人とその家族たちは、村八分にあつて他の地域に移動していったという。ここからそれほど離れた場所ではない。そこで、友人を誘って彼らを訪ねていった村に、ランテンヤオ族(写真①)がいつしよに暮らしていたのである。

副村長の家で、村八分にあつたという人たちに会って話をしていると、集まってくれた人たちの一人が、日本語で書き留めている私のフィールドノートを覗き込んで、「わたしピーするわけにもいかない。そこで、デジタルカメラ、三脚、パソコンなどを村に持ち込んで、撮影することになる。基本的に、ラオスの山奥の村には電気がないので、デジタルカメラやパソコンのバッテリーがもつかどうか心配だったが、幸運なことにランテンヤオ族の大きな集落は、電気のある地方都市の近くに移動してきており、町のゲストハウスから通うことができた(写真②)。

村長や祭司の家の一部を占領し、朝から夕方まで、1村につき3日から4日間かけて撮影した(写真③)。家を占領された彼らには、大変迷惑であつただろう。さらに、撮影中は、雑談を交えながらも、文書の使い方から村の生業や歴史まで細かく聞かれるのだから、さぞかしわずらわしい連中だと思つたに違いない。後日、調査した村の近くに用事があつて、村長とぼつたりでくわしたが、これといったこだわりもなく話せたところをみると、案外それほどはなかつたのかもしれない。

重要な文書があるという情報をもとに、撮影器材を担いで1時間の山道を歩いたのに、他人に売ってしまったことがわかったり、ランテンヤオがいるといわれて訪ねた地域に、彼ららしき人々が見当たらなかつたりと、調査自体が試行錯誤である。集めた文書の整理も今後ペースをあげていかななくてはならないが、協力してくれているランテンヤオの人たちのためにも、成果本をきっちり仕上げなければならないと考えている。

# 国境のない 信頼関係の構築を

●石澤良昭（上智大学学長）

**カ**ンボジアへ行くたびに、生きる喜びが満ち溢れているのを感じる。貧しいのに何故なのか。それは人々の心が満たされ、人間本来の考え方が完全に機能しているからにほかならない。巨大な自然とまっすぐ向き合っているから、それぞれの生活の中で満足を覚えているからである。また、カンボジアの人々が、誰に対しても優しいのは、自分にそれなりの自信や心の豊かさがあるからであろうか。確かに日本は物質的に満たされているが、人に対する優しい心はどうなってしまうのかと思うことが多い。私は、日本の学生たちにカンボジアへ行って貧しさの中から人への優しさと心の豊かさを学んでほしいと、いつも願っている。

私はアンコール・ワットなどの遺跡の保存修復活動を通じて、東南アジア史を研究してきた。遺跡の保存修復はあくまでも現地のカンボジア人たちの手によってなされることが望ましい。民族固有の文化を世界へ向かって説明できるのは、誰よりも現地に暮らす人々が適任である。保存修復事業や人材養成に関する協力は、何と言ってもそこに暮らす人々を援けることがその基本でなければならぬし、それこそが国際協力のあり方であろう。

であるという極めて単純なものであり、それは遺跡保存活動を推進するにあたって、肌の色、言葉の壁を突き破り、個々人のレベルでどれだけ「国境のない信頼関係」が構築されるかにかかっている。

私たちはまずカンボジアにおいて生活の中に学ぶべき「知」の遺産があることを認識している。同時に日本の「生活知」をカンボジアの人たちに継続的に伝えていく。この相互の文化を尊敬し、尊重するという態度が、カンボジア人たちの私たちに對する信用度（クレディビリティ）を高めてきたと思われる。

シハヌーク前国王は「カンボジアが困難に直面していた時期にアンコール遺跡の保護のために手を差し伸べてくれた。私たちは最初に井戸を掘った人を忘れない」と、1992年プノンペンで開かれたユネスコとの御前会議で述べられた。国交回復の前のものであった。

**2**001年、上智大学アンコール国際調査団（以下調査団）は33回目の考古学研修中に274体の仏像を発掘した。カンボジアで初めての千体仏石柱も発掘した。考古発掘研修を始めてすでに11年の歳月が過ぎていた。発掘場所は仏教寺院だったバンテアイ・クデイ遺跡（12世紀末）で、仏像は深さ約2.5mの穴に埋納されていた。仏像の時代は10世紀から13世紀後半である。

カンボジア人研修生たちがこれらの仏像を取り上げたことは、何よりの快挙であった。国内外に大きな反響があった。カンボジアでは内戦・地雷・虐殺というイメージを吹きとばした。やっぱりカンボジア人は偉大な歴史を営んできた民族であるという自信回復につながったのであった。

アンコール遺跡が世界に知られて約150年経つが、アンコール遺跡の調査中にこのように大量の仏像が出土した事例は初めてである。しかもこれらの仏像の詳解を通じてこれまでの歴史の通説が覆され、アンコール王朝末期の歴史が塗り替えられたという意味においても、これは画期的

カンボジアは1970年から内戦に入り、アンコール遺跡は1993年の和平達成までの24年間放置され、遺跡保存官（約36名）が行方不明となってしまった。

私たちは遺跡を守る人材を養成するため、プノンペンの芸術大学の再開および和平の兆しが見えてきた1991年3月から、特別な「遺跡保存人材養成プロジェクト」を立ち上げ、現地へ乗り込んだ。それは考古発掘調査および保存修復を指揮できる保存官候補、そして中級レベルの技術を持った中堅幹部と石工の養成の3本立てで始まり、現在も続いている。

ちなみに、本学大学院地域研究専攻におけるカンボジア人保存官の学位取得者は、2009年3月までに修士が13名、博士号取得者7名である。彼ら全員がカンボジアへ戻り、政府閣僚評議会専門委員、文化芸術省局長、プノンペン市観光局長、アプサラ（アンコール地域遺跡整備機構）の局長級の要職、プノンペン大学教授、王立芸術大学教授などとして活躍している。

**私**たちは遺跡保存のプロジェクトを通じて、30年あまりにわたりカンボジアの人たちと強固な信頼関係を築いてきた。基本的な立場は、「国際協力とは人間の協力」

発掘であり、世紀の大発見につながった。

**岡**田卓也氏（イオン名誉会長）が2002年3月にカンボジアに植樹のため来訪された折、現地の上智大学アジア人材養成研究センターでこれら仏像を鑑賞し、あまりに美しいその尊顔に感動されて、博物館建設をご提案いただいた。その結果、建物面積1728㎡の2階建ての博物館ができあがった。この新博物館は2007年11月2日、カンボジア王国のシハモニ国王のご臨席を仰ぎ、日本国大使ら約500名が出席し落成式を執り行った。直ちにカンボジア政府に寄贈された。

また、調査団は1993年に、アジアで最大級の石造伽藍アンコール・ワットの西参道の調査を開始した。最初にカンボジア人石工の訓練を始めた。そして建築学若手幹部、作業員たち約60名の頑張りにより、約11年の歳月をかけてラテライト（紅土石）のブロック約6000個を12段の擁壁に積み上げ、第1工区の100mが完了した。カンボジア人による最初の修復工事であった。2007年11月3日に、同参道においてソク・アン副首相のご臨席のもとに完成式を執り行った。

以上が私たちの人材育成プロジェクトのあらましである。私はこうした遺跡保存・修復・発掘の実体験を通して、人間の信仰の深さ、愛すること、労働の苦しさ、死の悲しみなど、人間のさまざまな感情をアンコール・ワットの中に読みとることができた。時空を超えてどんなに科学が進歩しても、また民族が異なっても、人間のこの本質は少しも変わっていないことを感じたが、私の深読みであろうか。

●いしざわ・よしあき

1937年生まれ。上智大学外国語学部フランス語学科卒業。聖マリアンナ医科大学助教授、鹿児島大学教授等を経て、1982年より上智大学教授。現在、上智大学学長、上智大学アジア人材養成研究センター所長、上智大学アンコール遺跡国際調査団団長。2007年から2009年まで文部科学省文化審議会会長を歴任。近著に、『東南アジア多文明世界の発見』（講談社）がある。トヨタ財団評議員。



JOINT  
ホット・インタビュー

助成対象者／宮川敏彦

## 「炭の文化力」を高めるために

●聞き手：楠田健太(トヨタ財団プログラムオフィサー)

宮川さんは地元・高知県で20年以上にわたって、大学等の研究機関には所属せず、在野の立場から備長炭の産業と技術、歴史や文化について、徹底したフィールドワークにもとづいた研究活動を行っている。今回、土佐備長炭の本場である室戸（高知市内から車で約2時間）で、実際に炭作りの現場を案内していただきながらお話を伺うことができた。

**宮川さんが備長炭の研究を始めたきっかけは何だったのでしょうか？**

私は高知県西部の農家の長男で、高校生の時から農山村の産業や文化に関心を持ち、調査によく行きました。今から20年ほど前、和歌山の宇江敏勝さんという、山に暮らし、炭職人でもあった作家と知り合い、高知にも備長炭の技術があることを教えられました。それで、自分でも調査してみたら、これがとにかく面白い。それ以来、高校に勤務しながら休日には高知市内から室戸に通い、泊まりがけで山中の歴史窯の跡や生産者のもとをまわっていました。

2007年にトヨタ財団の助成を受けるまでは全部自腹で行っていました。遠くて時間もかかるし、お金も体力もいるので途中何度かやめようと思ったこともありましたが、生産者の方々の情熱に打たれて、何とか今までやってきたという感じです。

**確かに「備長炭」というとどうしても紀州(和歌山)のイメージがあります。**

土佐に備長炭の技術が入ってきたのはちょうど100年前、明治の終わり頃です。植野蔵次という紀州備長炭の職人がお遍路で室戸に来たとき、ここにも備長炭に適したウバメガシが繁茂しているのを見て移住を決意、その技術を伝えたといわれています。

その後、炭は無煙の燃料ということで都市の発達とともに需要が急激に増加し、木炭産業が発展していききました。昭和20年代、備長炭の炭職人は室戸だけで700世帯ほどいたようです。それが昭和30年代以降、高度経済成長を契機に燃料の主役は石油に取って代わられ、職人の数も徐々に減っていったのです。現在室戸の生産者は22世帯、かつての3%ほどになりました。

**すこい減(Shukoi-hupe)ね。**

研究者についても同じことがいえます。かつては創森社という出版社から『炭の力』というとても良い雑誌が出ていたのですが、現在はそれも廃刊になってしまいました。

炭の科学的な分析や商品化の研究は盛んですが、炭を可能性ある産業として捉え、地域の歴史や文化を研究する人は、メシの種にならないということもあって、今では、皆無に近い状況です。しかし、産業としての炭を研究する者もいないと炭の文化は廃れてしまう。このようなときこそ、研究者はがんばっている生産者を応援しなければいかんと思う

みやがわとしひこ  
宮川敏彦(2007年度 研究助成プログラム助成対象者代表)

【題目】「炭の技術と文化の里」・「木炭交流の道」実現のために——土佐備長炭、室戸の挑戦

【助成額】412万円(2007.11～2009.10)

【助成概要】技術を熟知している第一線の生産者と研究者が一体になったチームで、室戸地方に残る土佐備長炭の現状と伝播の歴史を解明する。備長炭は東アジアの照葉樹林地帯内でも限定された地域にしか生育しない原木を用い、木炭の中でも最も優れた技術的特徴がある。高知県室戸市一帯に残る土佐備長炭のルーツと技術交流の歴史を調査して、東アジアの木炭交流の道を明らかにするとともに、木炭によって集積された室戸地域の生活史的・文化史的遺産を活かした地域づくりを行うための研究と実践を行う。木炭の伝播の道に関する研究に学会の蓄積がほとんどない。木炭の文化史・技術史研究に貢献するとともに木炭文化による地域作り、社会教育に研究成果を活用する。

**そもそも備長炭とはどついつ炭なのでしょう？**

木炭は大きく分け、製法によって黒炭と白炭の2種類があります。黒炭は、原木を土窯で熱分解した後、そのまま窯の中で密閉して蒸し消した木炭です。一方白炭は、800度以上の高温で焼き、それを窯からかき出して、素灰をかぶせて消火します。その際、灰が付着して、白っぽくなるため白炭と呼ぶわけです。備長炭とは白炭のうち、カシやウバメガシを原料とし、鋼鉄に近い硬度を持ち、断面が美しい貝殻状、叩けば金属音がするなど、いくつかの条件を満たした炭です。

日本で備長炭の技術が確立したのは、約300年前、江戸時代・元禄年間の頃。当時紀州(和歌山県)で問屋を営んでいた備中屋長左衛門にちなみ、この名が付けられたといわれています。



## 土佐備長炭の窯出し風景

宮川さんの案内で、室戸の炭焼き窯を訪ねることができた。ちょうど「窯出し」作業が行われているときに、宮川さんの説明を聞きながら見学できたことは、われわれにとって、またとない貴重な体験となった。そのときの様子を数点の写真で紹介しよう。

- ① 陽光にきらめくウバメガシの葉
- ② 炭焼き小屋全景
- ③ 炭窯の天井部分
- ④ 次に窯に入れられるウバメガシ
- ⑤ ⑦ 窯から焼けた炭をかき出す
- ⑥ 灼熱した窯の中。1000~1300℃くらいになるという
- ⑧ 素灰をかけて消火される直前の炭。生木の状態と比べると重さは10~12%減り、太さは半分から3分の1程度に縮むという
- ⑨ 昼食は、できたての炭で焼いたウナギをいただいた

撮影地：室戸市羽根町・森本生長さんの窯  
写真撮影：小林洋治



のです。現在、日本国内の炭の需要は大きくなり、未来の産業なのでから。

### 今回のプロジェクト期間中、旺盛な研究活動をされたと伺っています。

今回のプロジェクトでは、20年来の付き合いである3名の生産者（森本生長氏・仙頭博臣氏・杉本正一郎氏）と高知大学の田村保興教授を共同研究者として迎え、日本各地および中国の備長炭産地でフィールド調査を一緒に行いました。それぞれ20〜40年のキャリアを持つ方々ですから、たとえば各地に残る昔の窯跡を見るだけで、その製炭法の違いや、伝播の過程がほぼ分かるのです。しかし、これまで職人さんたちが高知県外に出る機会はありませんでした。今回助成金を得て、いろいろな土地の数多くの製法に接し、それぞれの地域に適した多様な技術があつて、それが日本の備長炭を支えているということを知り、自分たち自身にも新たな気づきがたくさんあつたようです。

しかし、この人たちとてもう60歳過ぎ。私は65歳。幸い、室戸では青年の製炭者が近年つぎつぎ育ち、うれしい限りですが、われわれ

れの世代以上がいなくなると、土佐備長炭の歴史や技術を語れる人はいなくなります。残念なことに、そういう人は室戸市の教育委員会にも農林課にもおらず、公営の資料館もありません。一度ゼロになってしまうと、回復はなかなか難しいでしょう。

### 何とか解決する手立てはないものでしょうか。

たとえば和歌山では、4〜5年前から県が毎年2900万円を出して、窯を修理したり研修体制を整えたり原木林を育てたりと、備長炭の振興に力を入れています。りつぽな炭の博物館が2つもあります。地域の伝統産業をととても大切にし、誇りにしているのです。和歌山の人に、地元の特産物を聞いたら必ず備長炭と梅を挙げます。やはりこの文化的な厚みの差は大きい。実際、同じ備長炭にもかかわらず、土佐の備長炭は紀州の約3割安。長い歴史のなかで紀州備長炭の作り上げてきた社会的価値なんだと思います。

これは生産者の努力だけではどうにもならない部分なので、研究者も育て、行政の協力も得ながら、地域全体で「炭の文化力」を高めていかなければなりません。私は、自分が生きているうちに本を作ったり、古い文献を現代の人にも読みやすいよう書き直したり、資料館を作ろうと計画したりしていますが、世界に誇る日本備長炭は、50年、100年以上の未来まで続きます。困難な時代に私が研究を始めたように、です。いつか興味を持って引き継いでくれる人が出てきてくれることを期待しています。研究に関しても行政のサポート

に関して、和歌山よりも立ち遅れている分、今後のやりがいはいはむしろ高知のほうが大きく残っていると見えるかもしれませんけど(笑)。

### 最後に、若い人たちへのメッセージをお願いします。

炭の職人には、坂本龍馬や板垣退助のような特別に有名なヒーローはいません。ですが、長い歴史のなかで、炭はほんの半世紀前まで生活に欠かせないエネルギーとして、人々の暮らしをずっと支えてきたのです。山で木を伐り、自分で運んで、その木が窯の中で変わっていく様子を一度直に見てほしい。自然とともに生き、技術者としての誇りをもって日本の第一次産業を支えていく。そんな職業も、若い人たちにとってやりがいのある、魅力ある選択肢の一つだと思います。

高知県には、広い海と豊かな山がちゃんとある。この地域の資源をどう使うのか。炭でもこれまでのように材料を提供するだけでなく、付加価値を付けた商品を提供することで、地域を盛り上げていく。水質浄化、脱臭、置き物、その他諸々の炭入り商品、何よりも未来への大きな可能性を持つ炭素の科学的利用など、燃料以外にも炭の用途はいくらでも開けていくでしょう。若い人たちには、炭の産業と文化を受け継ぐだけでなく、新たな産業を創造し、地域や国内のみでなく、アジアの文化として広く世界に発信していったほしいと願っています。

理想を高く掲げながら、それに向かって地道な努力の積み重ねが必要なのだと思います。

# 過去と未来をつなぐために

●加賀道(トヨタ財団プログラムオフィサー)

身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」とは、コンクール形式で実施された助成プログラムである。研究は研究者が行うという概念が一般的だった当時、市民が自分たちの暮らす身近な環境に関心を持ち、自ら研究を行うことで市民力を高めていけるのではないかと狙いのもと、当プログラムはスタートした。助成の段階が分かれており、まず予備研究(8カ月)を実施し、その成果を選考委員会が選考、本研究へ進むという流れで助成が行われた。最終的な選考により、最優秀賞が決定された。

創刊号に引き続き「温故知新」では1979年から1997年まで実施された「市民研究コンクール」の助成対象団体を取り上げる。助成当時から現在に至るまでのお話を伺うことで、新たに見えてくる成果や周囲へ与えた影響などを取材するのが狙いである。前回には北海道へと足を運び、函館の「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」と、岩見沢の「岩見沢の鉄道復興を考える会」を訪ねた。時間を超えてつながること、継ぐ(想い、技)こと、いろいろな形を見た取材となっ



火鉢を使った植木鉢(最優秀賞受賞記念絵はがき)。「人がものを転用して使う理由は、貧しさだけではないようだ。そこからは、くらしを楽しむための工夫や、ものに対する愛着や遊び心が感じられる。日常のくらしの中に見出される豊かな一片である」

ルの応募へ至ったという。

文化財とは、国が歴史上、芸術上、学術上、観賞上等の観点から選定した有形・無形の文化的所産のこと。それに対して「私のえらんだ文化財」とは、不用になった火鉢や鍋を植木鉢に転用、はたまた道端に捨てられた缶ジュースのプルトップに至るまで「私」という基準で選ばれたさまざまなものを登録するという試みである。「私設の文化財登録制度」を作り、研究メンバーと市民への呼びかけにより助成終了時まで登録された件数は1189件にのぼる。今回の取材では、代表の岡本信也さんをはじめ、岡本靖子さん、そして「当時は若手でした」という加美秀樹さん、山田稔さんのご協力をいただいた。

この活動がユニークなのは、単に文化財として登録するのではなく、なぜそれを選んだのかについて読み取り作業を行う点である。ものを選び、分類、分析する行為を続けることで自分でも気付かなかった「私」がよく分かるようになった、と語ってくれたのはメンバーの一人、岡本靖子さん。驚くことなかれ、この登録作業は現在も続いており、その数は2250点を越えたとのこと。

このグループは、集めた文化財を模型・実物・写真・作図など、さまざまな形で展示公開発表し、多くの来場者に強い印象、共感を与えている。今年9月にも「軒下ミュージアムマチ歩き暮らし発見」という展示発表およびシンポジウムを、6月に刊行された『軒下ミュージアム』を記念して開催している。

## ◆伝統は形を変えながら生きていく

文化財の研究を長年続けてきた岡本信也さんは文化の継承について、同じものが続くということはありません。一度壊れて、切れて、そしてまた新しく変化し



牛乳箱のミニチュア。「各家庭に冷蔵庫が普及し、牛乳配達が減り、家の戸口から牛乳箱が見られなくなりました。その後、ミニチュアができたりする。ここまで来ると、牛乳箱そのものを懐かしむ人もいれば、ミニチュアの方に価値を感じる人も出てくる。ものを選ぶ行為に決定項はないのです」と岡本信也さんは語ってくれた



『軒下ミュージアム——わたしと世界のあいだを観察する方法』野外活動研究会により、2009年6月に発行

た。またそれぞれが自分の暮らす地域でアクションを起こしたいという想いを抱き、コンクールという競走(共走)形式であったからこそ、効果的な刺激を与えていたと感じた取材でもあった。

そして今回は西へと足を運び、第6回市民研究コンクール(1992年)において、最優秀賞を獲得した「私のえらんだ文化財——人はどのようにしてものを選ぶか——」(代表者:岡本信也さん、名古屋)および、同年の助成対象案件である「蒲生野における身近な水と生活文化の研究——『あたりまえ』の農村の『あたりまえでない』水環境調査——」(代表者:故・池内順一郎さん、滋賀)を訪ねることを決めた。

前回の温故知新に引き続き、当時アソシエイトプログラムオフィサーとして市民研究コンクールの運営を担当されていた萩原なつ子さん(現:立教大学社会学部社会学科教授、21世紀社会デザイン研究科教授)と、そのゼミ生である岡田真一郎さん(写真撮影協力ほか)に一緒にいただき、温故知新トリオでの取材を行った。

名古屋、野外活動研究会「私のえらんだ文化財——人はどのようにしてものを選ぶか——」

## ◆変化する街並みの中で気づいたこと

1980年代後半から90年代にかけて日本はバブル景気に沸いていた。この研究の舞台となった名古屋の街でもむやみやたらに建物が壊され、工事中の看板があちこちに立ち並んだ。そのことに気が付いた岡本信也さんは、89年に工事現場を地図上に落としていく調査を実施。なぜ人はむやみやたらにものを壊すのか、人は何を大切に思っているのか、という問いから「人はどのようにしてものを選ぶのか」という調査へと発展し、91年(予備研究が91年、本研究が92年)の市民研究コンクー

で続いていくことが本当の意味での文化の継承だと思えます、と語る。お祭りにしても、一昔前のお祭りとは比べるとずいぶん華やかになった、同じものが続いているようでいて、実は新しくなっている。新しいものが増える分、それによって古いものも増える、それだいいのだと教えてくれた。懐かしいと思う人がいるからそのものをよいと思う価値観が生まれるのであって、その人たちが亡くなると、そのものを懐かしいと思う人がいなくなる。たとえば明治という時代が終った時、明治を懐かしんで明治ブームが起きたけれど、明治を知る人がいなくなったらそのブームはなくなってしまう。今は昭和を懐かしむ人がいるから昭和ブームが起きている。いろいろな前提によって、価値観は常に変わっていく。私たちが活動を始めたときに登録したものを、今の自分たちの価値観でもう一度見直したら、違うものに見えるかも知れない。このような考えから、現在取り組む活動のひとつとして、かつて登録した「私の文化財」をもう一度現在の視点・立場から定点観察し、新たな分類整理を行っているという。まさにに終わりのない作業である。

文化や保存の方法に関して、常に市民の視点からの考えを発表してきた岡本信也さんら。「保存とは、ただ箱だけ残せばいいということではないんです。たとえば、老舗百貨店が閉店になったときに、箱である建物だけでなく、そこに陳列されていた中身である商品も丸ごと残す。それをもし30年先まで保存できたら百貨店が博物館になるのです」など、生まれるアイデアは今も尽きることがない。地道な活動を続けるという信念がある反面、時流の変化を柔軟に受け入れ新しいことをよしとする、ある意味こだわりのないスタンスが印象的であった。常に社会に向けた発信をおこない、市民の視点から文化財のあり方を提示し続けて

いる野外活動研究会の取り組みは「文化財」を決める側の文化庁へも影響を及ぼし、近代建築の保存を後押ししたり、地域に一昔前の懐かしいものを集めた資料館ができるなど、今も展開しつづけている。

滋賀、蒲生野考現倶楽部「蒲生野における身近な水と生活文化の研究——『あたりまえ』の農村の『あたりまえでない』水環境調査——」

### ◆「たんけんはっけんほっとけん」

滋賀・蒲生野には、かつて生活に欠かせない貴重な水を運んでくれた溝（みぞっこ）があった。いつしかその溝は排水路と化し、連綿と引き継がれてきた水にまつわる生活文化がほとんど見られなくなっていた。物質的な豊かさ、便利さを得た人々は、かつて溝で食器や衣服を洗っていたことを「貧しい」と考え、子どもたちへ語り継がれることもなくなっていた。そんな様子を憂いた人たちによって設立された蒲生野考現倶楽部は、身近にありながら価値が変わりつつある水環境を、子どもたちとともに「探検」し、なにかを「発見」することで「ほっとけん」という気持ちにしたいというコンセプトのもと、研究活動に取り組んだ。

今回の取材は、定期的に実施しているという植物調査、水質調査の定点観察日に合わせて伺った。朝からあいにくの雨の中、果たして定点観察は行われているのか。一抹の不安を抱きながら滋賀県は蒲生郡へと向かう。私たちの心配をよそに、雨具をまとった方々が植物調査を行っていた。この調査は蒲生野考現倶楽部の活動の一部で、環境省が実施する「モニタリングサイト1000」（日本全国約1000カ所）で長期的に植物や水質調査を行う試みである。日本各地のNPOや、研究者らが手分けして調査を受託、実施してい

### ◆子どもに必要なもの

韓国へ出張中であつたため、残念ながらお会いできなかった活動当初からの中心人物、井阪尚司さんの存在の大きさも今回の取材の端々から伝わってきた。当時、小学校の教員だった井阪さんは現在、山内小学校の校長先生。取材に対応してくださった歯黒恵子さんは、井阪先生はね、「子どもたちはほとんど外に出たほうがいい。周りの環境から、国語・算数・理科・社会・歴史、音楽、体育、何でも学ぶことができる」といつも話すんです。そんな校長先生はなかなかいませんよ、と笑いながら話す。当時教員だった井阪さんとPTAが核となつて始まった活動は、その後、PTAだけではもつたないということでメンバーを拡大し現在に至っている。

萩原さんは、メンバーに教育関係者が参加していたこと、子どもを利用するのではなく一緒に活動してきたことが、この活動を成功に導いたポイントだと強調していた。

### ◆活動の広がり

1990年に開始した蒲生野考現倶楽部の活動は、水環境にかかわらず、教育、まちづくりと、ほとんどその枝葉を広げている。田植え・植物観察、螢ほのぼのコンサート、みぞっこ探検生き物調査、稲の花・昆虫観察、かいどり大作戦（魚とり）、収穫祭など毎月のように子どもと一緒に活動が実施されている。4年前からは、韓国の八堂湖と日本の琵琶湖を子どもたちが行き来し、それぞれの水環境を学ぶ交流事業も始まっている。

歯黒さんは「他の団体のように何かを一筋でやるというのと違って、蒲生野考現倶楽部は何でもありやもんなあ」と不安そうに一言。「ほっとけん」ことがいつ



取材中に偶然見つけたミズギボウシ



定期的に行われている水質調査の様子



蒲生野考現倶楽部のイベント案内。さまざまな活動が毎年行われている

る。91年（予備研究、92年本研究）にトヨタ財団の市民研究コンクールで水環境調査を子どもたちとともに行っていた実績、その後も着実に実力をつけていること、周囲からの評価・信頼を獲得できていることが現在の定点観察の実施に結びついていると感じた。地味な作業と思われがちな植物調査中ではあるが、この日の観察で貴重な体験をすることができた。「レッドデータブックに載っているミズギボウシです！」という声に集まる人。「先月はまだ咲いていませんでしたね」と興奮した様子。調査は隔月でもいいという意見も出ていたのですが、来月だったらもう枯れてしまいう観察できなかつたでしょう。やはり毎月実施する必要がありますねと一言。定点観察の重要性を目の当たりにすると同時に、楽しむことが継続に繋がることが学ばせてもらった。

市民研究コンクールの助成対象当時から続いている活動として、かいどり大作戦という魚の手づかみ大会がある。子どもたちに人気の行事で、毎回150人程度の参加があるという。15年以上同じ川で魚とりを実施する中で、最近はブルーギルなどの外来魚が多く見られるようになったが、一方でここ数年取れなくなっていたアユがまた取れるようになったのだから。遊びを通じて、身近な環境の変化を直接感じている様子。自分たちの暮らす地域で継続的な活動を実施することの意義を、このような点からも見出すことができた。

はいあるですよね、との私たちの突っ込みに「探検して、いっぱい発見して、ほっとけんこともいっぱいなんです」と笑う。蒲生野考現倶楽部の活動は確かに多岐にわたっているが、目指す方向性が定まっている。事務局を核として活動ごとに部局を設け、それぞれの活動を愛する人が担って運営する体制づくりは、継続的な活動のヒントになると感じた。

### ◆終わりに

今回のふたつの取材先は図らずも、定点観察を実施しているという点に共通項が見られた。名古屋の野外活動研究会では、定点観察や、私設の文化財産録を継続するという地道かつ根気の必要な作業とは裏腹に「攻め」の姿勢が感じられた。変化を受け入れる柔軟さ、そして市民や行政、企業へと発信し続けるという姿勢がそうさせているのだろうか。保存というものの考え方を深く深く考えさせられた、まさに目からウロコのひとつであった。現在2000点を超えている「文化財」が、30年後、50年後にどのような価値観のもとで、もう一度観察されるのだろうか、そんな気持ちにさせてくれる魅力がある。

蒲生野考現倶楽部の定点観察や長年にわたる活動には、次世代を担う子どもたちとともに、身近な環境がもつ可能性を未来へと繋いでいきたい。そんな想いを感ずることができた。その想いは、幅広い活動へと広がりを見せている現在にも一貫して流れ、今なお賛同者は増えつつづけている。ぜひとも蒲生野の自然環境や、子どもたちの将来の姿を見にまた訪れてみたい。今回の「温故知新」は、当時の活動から現在までを振り返ることで、未来へと関心が広がっていく、長い時間を過去から未来へ辿っていくような取材となつた。



活動地へおじゃまします!

【訪問先】  
信州大学教育学部附属長野中学校

【助成対象者代表】  
宮入賢一郎〔(特活)CO2バンク推進機構〕  
(2008年度地域社会プログラム助成対象者)

【助成題目】  
「環境・モノづくり長野——地域で支える世界に羽ばたく次世代を育てよう！」

中学生がつくる

# 未来のエコカー

●鷲澤なつみ(トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー)

## 長野に息づく次世代を育てる仕組みづくり

2009年9月12日、13日、長野県長野市にある五輪施設エムウェーブにおいて、1リットルのガソリンで、何キロを走ることができるかを競う、自作エコカーの燃費競技イベント「エコマラソン長野」が開催された(右下写真)。今年で3回目の開催となるこのイベントは、長野市立篠ノ井西中学校でのエコカーづくりにはじまり、製作したエコカーを走らせたという生徒の強い思いから、実現にいたった。現在では、地域のひととの広がりだけでなく、地域の企業や行政、メディアなども巻き込んだ活動となっている。「中学生がエコカーづくり!?」そんな驚きを胸に、今回は2008年度地域社会プログラム助成プロジェクト「環境・モノ」づくり長野——地域で支える世界に羽ばたく次世代を育てよう!」の活動地へおじゃましました。

8月某日、「勉強もかねて行ってきなさい」と思いがけず取材の機会を得た私は、「手作りエコカー」の巻き起こす物語に出会うべく、長野へ向かう電車に乗っていた。長野駅に到着すると早速、今回お話をしてくださるプロジェクト・リーダーの宮入賢一郎さん(NPO法人CO2バンク推進機構理事長)とサブ・リーダーの箕田大輔さん(信州大学教育学部附属長野中学校教諭)らが待つ信州大学教育学部附属長野中学校へ向かった。宮入さんと箕田さんは、共にトヨタ財団の助成対象者である。技術科教諭の箕田さんは、「日本の伝統芸ともいえるものづくりの楽しさを、子どもたちにも知ってもらいたい」と、今から8年前に中学校の技術科目にエコカーづくりを取り入れ



信州大学教育学部附属長野中学校の生徒たち

るテーマなのです。それに、人が実際に乗ることができる車をつくるには、中途半端な技術力ではできないので、より高性能な車を作ろうと目指すから、高い技術力も身に付くのです」と話してくれた。さらに、環境への意識向上という面では、「いかに燃費を抑えて走行するのか、1リットルという限られたガソリンにどれだけの力があるのか、ということを考えることで、環境に優しい運転の仕方や資源の大切さを学ぶことができるのです」と教えてくれた。こうした魅力から、エコカーづくりは次第に多くの人を巻き込む活動となっていき、中学生だけでなく、高校生・高専生・大学生、社会人や地域へと広がりをみせていったのかもしれない。エコカーづくりには心をくすぐる不思議な魅力があるのだと感じた。

## 地域を元気にする人と人とのつながり

エコカーづくりに魅せられた人の多くは、製作したエコカーの技術を確かめようと、ガソリンの燃費を競う大会に挑戦する。そこで、次に燃費競技大会「エコマラソン長野」についてお話を伺った。「エコマラソン長野」は、「日本や世界各地で開催されている省エネカーの大会を地元の長野で開催したい!」「家族や地域の人も気軽に見に来られる大会を開催したい!」。そんな思いから、参加者やOB・OGみんなで地域の方々の協力を得ながら運営されてきた。大会が開催されるはじめた当初は、仲間内で行う小さな規模のものであったが、今ではエコカーづくりの輪も着実に広がり、子どもから大人まで、幅広い年齢層の参加が見られる。「この大会は、全国大会の予行練習の場としてだけでなく、参加者にとって新たなアイデアや技術を学び、年



た。その後、保護者らの理解と協力もあり、活動は順調に進められた。2006年度にはトヨタ財団の研究助成プログラムの助成を受け、「1リットルのガソリンで1000kmを走行する車の条件は何か」という研究を中学生と共に行った。「エコマラソン長野」はそんな彼らが中心となって、地元NPO(CO2バンク推進機構)と協力してはじめた環境イベントである。そして、宮入さんも子どもたちの熱心な取り組みに触発され、2008年度地域社会プログラムの助成を受けて、エコカーづくりや環境イベントを今後も継続的に実施していくための「仕組みづくり」を目指すプロジェクトを箕田さんと共に立ち上げた。

## エコカーづくりの魅力とは

挨拶をすませると、まずは今回のプロジェクトのきっかけとなった箕田さんのプロジェクトについてお話を伺った。プロジェクトを見ていくうえでまず注目すべきことは、「エコカーづくりの魅力」である。箕田さんがエコカーづくりをはじめたから、この活動は周辺の学校や知り合いを通じ、次第に交流が広がっていった。かなりの労力を要するエコカーづくりが、なぜこのようにながりを生んできたのか。そこには「面白い」だけでは語りつくせない奥深さがあった。



エコカーづくりの魅力を語る宮入さん(左)と箕田さん(中)

箕田さんのお話によると、エコカーづくりの魅力は大きく分けて2代を超えた人と人とのつながりを生む場にもなっている」と宮入さん。大会は、地域で薄れつつある「つながり」を再び強め、地域を元気にする重要な素となっているようだ。また、「持続的な活動を行っていくためには、地域の協力が不可欠でしょう」と語る宮入さんは、今後もさまざまな人を巻き込み、引き続き地域の協力を得ながら活動を行っていきたく、これからの活動に意欲を示した。そして、参加者一人ひとりが、立派なエンジニアの一人として大会に挑戦している様子から、「こうした大会の開催を通じて、地元の人や子どもたちに、もっと身近にエンジニアの存在を感じてもらえれば嬉しい」。そう箕田さんは笑顔で語ってくれた。

取材を終え、エコカーの魅力にどっぷりと浸った私は、帰り際に「エコカーに乗ってみますか?」という思いがけない言葉をかけてもらった。喜び勇んで部屋の片隅に置かれていた2台のエコカーに歩み寄り、エコカーに乗り込もうとした。しかし乗れない!!体を左右にねじってもなかなか座席に座ることができなかったが、コツを教えてもらいなんと操縦席に乗車することができた。そして、中学生が製作したとは思えない立派なエコカーを細部まで見渡した。これがなんとも凄いこと!改めてその技術の細かさに驚き、さらなる魅力を感じてしまった。エコカーづくりが、生徒にとって、楽しく充実した活動として受け入れられているのだということを感じることができた。

9月に行われた大会は、天気にも恵まれ、会場は沢山の人が賑わっていた。今年の大会では、昨年の記録である515km/ℓを大幅に上回る1029km/ℓという記録も生まれ、参加者は来年に向けて新たな闘志を燃やしているようだった。地域にとって、この大会は、子どもの成長を共に見届け、応援する大切な場となりつつあるという印象を受けた。



「手作りエコカー」の物語はまだまだ始まったばかり!今後、地域

でどのような広がりを見せていくのか、箕田さんと宮入さんたちの挑戦はこれからも続く。

# OPINION

## 原点に戻って考える 財団の役割と機能



●渡辺 元  
(トヨタ財団プログラム  
ディレクター)

**当** 財団は1974(昭和49)年10月に設立され、今年で35年を迎える。設立当時と現在では、財団を取り巻く社会状況や環境も大きく様変わりしている。

設立当時の日本社会は、「振り返れば」「高度経済成長」の最終局面にあったが、依然として右肩上がりの経済成長が続くことを誰もが信じて疑わなかった「上昇社会」であった。その後、「バブル経済」とその崩壊を経て、90年代は「失われた10年」と称される状況に陥り、ここに来て漸く持ち直しの観を呈したと思つた矢先、今度は、昨秋の米国での「サブプライム・ローン」の破綻に端を発した世界的経済危機の影響を大きくこうむる事態となった。

この間、急速なグローバル化によって引き起こされるさまざまな問題と同時に、地域社会においてはコミュニティの崩壊などが懸念されるようになり、「ソーシャル・キャピタル」

(社会関係資本)など、人と人との関係性を改めて問い直す論調なども散見されるようになった。このことは、経済成長のみに頼らない社会形成のあり方に対する問いかけとも捉えられる。そもそも「経済」という言葉は「経済民」に由来する。「困難な状況にある人びとを救い、世を治める」ことを表すが、この点、今日の経済というよりは、政治や社会政策のことを本来的に指すものと思われる。

人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して、財団法人トヨタ財団の設立を決意いたしました。

トヨタ財団設立趣意書(1974年9月19日)より

**こ** 上で記された「福祉社会」とは何だろうか。上記に照らして考えれば、「経済民の社会」、すなわち、「人が生きやすい社会(Well-being Society)」と言つても良いかもしれない。人びとをつないだり包み込んだりできる「自由で包摂力のある社会」を意味することになるか。この場合、重要となるのは「他者」に対する「愛」、つまり、フィランソピー(Philanthropy)である。

これはまた、欧米をはじめとする多くの助成財団の基本精神でもある。こうした助成財団の役割と機能については、当財団の初代専務理事を務められた林雄二郎先生が、かつて以下のように記している。

財団とは、私的利益を追求するためにある組織ではなく、社会的利益に貢献するための組織である。

織である。そして現代社会における財団は、急速で、しかも大規模な社会的変化によってひき起される諸問題を、根本的に解決することがその役割である。……(中略)……すなわち、財団とは、社会がその未来のためにそなえている触媒であり、また、その健康さと多様性を促進するように機能する存在である。

トヨタ財団(1975年度年次報告より)

そして、未来への触媒の機能を発揮するため、先見性・国際性・市民性という3つの視点を打ち出し、これらを基にそれぞれ研究助成、国際助成、市民活動助成へと展開していった。現在の研究助成、アジア隣人プログラム、地域社会プログラムは、その時々の見直しを経て今に至るも、基本は当時の延長線上に位置づけられる。

## 流

動化の早く、激しい社会状況の中、助成財団としては、常に社会の変化の「兆し」に耳を研ぎ澄ませ、既存の制度や他の組織では対応ができていない課題や領域に目を光らせながら、「一歩先」を行く助成プログラムの創出と展開に向けた取り組みを行っていくことが大切である。

助成財団の特長と役割(助成財団だからできること。助成財団にしかできないこと)を存分に生かした社会へのチャレンジを、これからも心がけていきたい。

を日本国内から広く募集します。

みなさまのご応募を心よりお待ちしております。

### 【助成期間】

- 1年間(2010年4月1日から2011年3月31日まで)
- 2年間(2010年4月1日から2012年3月31日まで)

### 【助成金額】

- 総額1億2000万円(一件あたり年間300万円程度まで)

### 【締め切り】

- 2009年11月9日(月)消印有効

### 【選考結果】

- 2010年3月の当財団理事会終了後、翌月までに、応募者(連絡責任者)に文書にてお知らせする予定です。

## 2009年度アジア隣人プログラム、研究助成プログラムの助成対象決定

本年度の「アジア隣人プログラム」、「特定課題・アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」、「研究助成プログラム」の助成対象が外部有識者からなる選考委員会の審議を経て、10月8日に開催されたトヨタ財団理事会で正式決定しました。

## アジア隣人プログラム

2009年度は名称を「アジア隣人ネットワークプログラム」から「アジア隣人プログラム」に変更し「信頼と協働に基づくコミュ



# INFORMATION

●2009年度  
地域社会プログラム  
公募のお知らせ

●2009年度  
アジア隣人プログラム、  
研究助成プログラムの  
助成対象決定

### 2009年度

#### 地域社会プログラム公募のお知らせ

2009年度地域社会プログラムでは、10月1日(木)～11月9日(月)まで、「地域に根ざした仕組みづくり——自立と共生の新たな地域社会をめざして」を基本テーマに、地域づくりの実践プロジェクトを公募します。

私たちの基本的な生活の場としての地域社会は、グローバル化のうねりや少子高齢化の進展などを背景に、空洞化、荒廃といった危機に直面しています。しかし、こうした危機の根本的な解決は容易なことではありません。地域社会が直面する課題を解決するためには、中長期的な取り組みが必要であり、持続的かつ具体的ななはたらきかけを可能にする、地域に根ざした「仕組み」の形成が急務と言えます。本プログラムでは、このような「仕組み」の形成に繋がる、持続的な作用・効果の強い、具体的な結果を生むプロジェクト



### ふるさとの宝もの

- 発行：石見銀山世界遺産をめざす会
- 発行日：2009年3月31日
- 問い合わせ先：〒694-0305 島根県大田市大森町八-51-1 石見銀山資料館 [TEL] 0854-89-0846 [FAX] 0854-89-0159

石見銀山世界遺産をめざす会は、2007年度に世界遺産登録に登録された石見銀山の近代化の過程と鉱山町大森町の変遷を地域に暮らす人々の視点から再認識することを目的とした市民グループです。トヨタ財団では、2002年度、2003年度と2カ年にわたって助成を行いました。また、写真集の刊行にあたっては、成果発表助成を行いました。今回刊行されたのは、研究の過程で集められた古写真の写真集。地元の主婦を中心としたグループ「いも娘」との共同での刊行となっています。大森町に暮らす人々、同世代の人のみならず、手に取る多くの人にとって懐かしさを感じる写真集です。



### 工業松右衛門の謎とき

八ヶ年に及ぶ調査報告と一九八年振りの解釈にもとづいて

- 発行：NPO 鞆まちづくり工房
- 発行日：2009年5月30日
- 問い合わせ先：〒720-0201 広島県福山市鞆町鞆5番地 NPO 鞆まちづくり工房 [TEL/FAX] 084-982-0535

広島県福山市鞆町を拠点とするNPO法人鞆まちづくり工房は、先人達が育んできた歴史的街並みや港湾施設、伝統的産業などの歴史遺産を活かしたまちづくりを、地域の住民や行政に対して提案し、実践する様々な活動を行っています。その一環として、江戸時代の帆布製造者・築港技術者である工業松右衛門によって手がけられた鞆港の防波堤の調査が、大学との協働で8年間に渡って行われてきました。本書は、その成果として、より多くの市民の関心を先人の遺産へと繋ぐことを目的としたものです。

## BOOK REVIEW

### 出版物のご案内

助成プロジェクトに関連した書籍を中心に、話題の本を紹介します



### 平和構築

アフガン、東ティモールの現場から

東 大作 著

- 発行：岩波書店
- 発行日：2009年6月19日
- 価格：780円＋消費税

東大作氏（ブリティッシュコロンビア大学大学院）は、2007年度のトヨタ財団研究助成プログラムにおいて「平和構築における信頼醸成」プロジェクトで助成を受け、破綻国家などと総称される国際社会の脆弱な部分で、効果的に日本が平和構築のため貢献するにはどのような方策がありうるのかを検討しています。

その点を解明すべく、東氏は内戦を経験したアフガニスタン、東ティモールの現場で、NGO関係者、政治指導者、軍関係者、国連関係者に対して聞き取り調査を行ってきました。それを踏まえての、東氏の日本外交に対する提案が、本書の結論部に収められていますが、それは、国連との一層の協調の強化、民生部門への重点的な援助、援助におけるNGOの役割強化、平和構築の専門家の養成といった諸点です。

国際社会での平和づくりのために日本がどのような役割を果たすことができるかという問題意識をもつ読者の方にとって非常に有益な書籍と思われる。

なお、本書は韓国語でも翻訳・出版される予定です。

**アジア隣人プログラム「特定課題：アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」**  
本年度よりアジア隣人プログラムの特定課題としてスタートした本特定課題は74件（うち海外21カ国52件）の応募があり、11件（うち海外4カ国6件）が採択されました。昨年度の応募件数が31件、採択件数が6件であったことを考えると大幅な増加となります。本年度は①「アジア周縁部」から「アジア全域」へとプログラムの対象地域を広げたこと、②手書きの書簡や古地図など、ひとの手による書き物全般を対象に含めることで、伝統文書の概念がより広義に設定したこと、③これまで「保存」に重点をおいてきたが、「保存、活用、継承」まで一貫して取り組むプロジェクトへの助成を促したことが大きく影響している

それぞれは申請案件が対象としていられる地域は中央アジアを除いて、ほぼアジア全域に広がっており、採択された案件についても幅広い対象地域となっています。（↓19ページ参照）

**研究助成プログラム**  
本年度も昨年度と同様に基本テーマ「暮らしの豊かさをもとめて」のもと「グローバル化のもとでの地域の活性化」に焦点を定め、プロジェクトを公募しました。その結果、734件（うち海外52カ国298件）の応募があり、44件（うち海外8カ国12件）のプロジェクトが採択されました。昨年度の応募件数437件（うち海外33カ国135件）、採択件数26件（うち海外3カ国4件）と比較すると応募件数の増加と海外案件の国・地域の多様性が見られました。

選考委員会では海外からの申請案件の増加についてだけでなく、昨年度と比較して充実したものが多かったというコメントが寄せられました。

それぞれの選考委員会では、選考以外にもプログラムの次年度以降への具体的な提案などがなされ、これらを活かしてプログラムの改善に努めていきたいと思っております。

なお、選考結果、採択案件、公募についての詳細は財団ウェブ・サイト (<http://www.toyotafound.or.jp>) でご覧ください。

\*ここでの海外とは代表者が外国人国籍であることを意味します。

### トヨタ財団の主な活動記録

2009(平成21)年6月26日～10月8日

6月26日(金)	地域社会プログラムワークショップ(広島)	7月28日(火)	アジア隣人プログラム「特定課題：アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」選考委員会
6月27日(土)	地域社会プログラムシンポジウム(広島)	8月7日(金)	地域社会プログラムワークショップ(長野)
7月6日(月)	アジア隣人プログラム「特定課題：アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」選考準備会	8月8日(土)	地域社会プログラムシンポジウム(長野)
7月11日(土)	アジア隣人プログラム選考委員会	9月7日(月)	ビジョン懇話会
7月14日(火)	地域社会プログラム選考委員懇談会	10月8日(木)	第127回理事会
7月18日(土)	研究助成プログラム選考委員会		

## DIARY



四国取材へ向かう機中から富士を眺む

【編集後記】  
LAST WORD

● きっと人は……、未来を見ることはできないが、歴史から学ぶことはできる。

● 今号は、過去から現在にのこされた貴重な文書の保存と、それを取り巻く現状の問題点に照明をあてましたが、いにしえの人々が、一文字一文字心をこめて、さまざまな言語や方法で文字を刻んだことに感銘をうけ、感動し、この尊い行為への助成を続けられることに喜びを感じています。

● 現在は、はるかに文字や記録をのこすことが簡単になりましたが、はたしてわれわれ現代に生きる人間は、かつて時間と労力を費やし、必死の思いで刻んだ文字に勝るとも劣らないものを未来に託すことができるのか……。

● そのために今やるべきことは？との思いを秋風にのせて、『ジョイント』創刊第2号をお届けします。(AN)

● 本誌第2号の企画、編集は職場に復帰してからの大きな仕事となりました。編集会議や企画、取材の段階でもドタバタや行き違いなどがあり、関係者の方々に多大なるご迷惑をお掛けしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

す。それと同時に、第2号を無事に刊行することができたことを、ご協力くださった方々から感謝いたします。

この広報誌の制作には多くの人の手だけでなく、それぞれの「想い」が詰まっています。この仕事を通じて、自分自身もこれに込める「想い」を込めつつ、真摯な気持ちで仕事に取り組みなければならぬと改めて気付かされました。

みなさま、これからもお付き合いのほどよろしく願います。(EK)

● 私にとっては、修学旅行以来、十年ぶりの四国でした。室戸と松山。1週間ほど間隔をあけた、しかもともに駆け足取材でしたが、なかなか充実した旅でもありました。

● 旅することは考えることと似ているといった人がいますが、たしかにある地点をもとめて移動するという点ではそうかもしれません。「考えることも」旅することも運動であることは同様だからです。

本来このふたつは画然と分離できるものではなく、人は考えながら旅し、旅しながら考えるもの。であるにしても、取材をすすめるながら、やはり旅には出るものだと改めて思ったものです。というのも、「考えること」は内側へ向かう思考(知性)の運動であり、「旅すること」は感性(身体感覚)が外に開かれる運動である、いままらながらに感じたからでもあります。どんな小さな旅でも、そのことはいえるでしょう。

● 思考と感性の往還のなかで実践への道は拓けてくると思いながらも、昨今はいよいよ内側にこもりがち。心の「拠り所」も、意外に「外」で見つかるものなかもしれない。やはり、旅はするもの、してみなければ気付かぬことが多いもの、であります。

● さて、本誌の旅路も第二の地点に到着しました。これからは旅をつづけながら、『ジョイント』が私たちと読者の感性をひらく共通の窓となることを願っています。どうぞ「旅の仲間」として、末長くご同伴いただけますように。(二)

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT [ジョイント]

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォーム、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

---

JOINT [ジョイント] No.2

発行日	2009年10月15日
発行人	加藤広樹
編集人	野々宮彰彦

---

発行所	財団法人 トヨタ財団 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル37階 [TEL] 03-3344-1701 [FAX] 03-3342-6911 [URL] <a href="http://www.toyotafound.or.jp/">http://www.toyotafound.or.jp/</a>
-----	---

---

編集協力	石井 泉
デザイン	エディション・ヌース
印刷	文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

トヨタ財団は、1974年に「人間のより一層の幸せを目指して」トヨタ自動車によって設立されました。それ以来、世界的な視野に立ち、長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活、自然環境、社会福祉、教育文化等の多領域にわたって時代の要請に対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対し助成を行ってまいりました。

2009年度、トヨタ財団では『サステイナブル(持続可能)な社会の実現』、『地域の活性化と共生』を共通目標として以下の3つの公募プログラムを実施しています。

### 【地域社会プログラム】

「地域に根ざした仕組みづくり—自立と共生の新たな地域社会を目指して」の基本テーマのもと、国内における地域社会の再生と振興を目指す実践プロジェクトを助成しています。(予算1億2000万円)

◆助成額：100万円～300万円/件 ◆助成期間：1年または2年間

### 【アジア隣人プログラム】

「信頼と協働に基づくコミュニティ形成を目指して」のテーマのもと、アジアのコミュニティが抱える問題を解決する実践的なプロジェクトを助成します。(予算1億2000万円)

◆助成額：一般助成(200万円～800万円/件)、小規模助成(上限200万円/件) ◆助成期間：2年間

### ● 特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」

アジア全域で消失の危機に瀕している、人の手による書き物全般の伝統文書を対象として、多様なメンバーの共同参加による保存、活用、継承に取り組むプロジェクトを支援します。(予算3000万円)

◆助成額：上限500万円/件 ◆助成期間：1年または2年間

### 【研究助成プログラム】

「くらしといのちの豊かさをもとめて」の基本テーマのもと、「グローバル化のもとでの地域の活性化」に焦点をあて、社会的意義の大きい自由な発想に基づいたプロジェクトを募り、助成を行います。(予算1億5000万円)

◆助成額：個人研究(100万円～200万円程度/件)、共同研究(200万円～800万円程度/件) ◆助成期間：1年または2年間

また、上記の助成プログラムの他、助成プロジェクトの成果を社会に発信・普及する【社会コミュニケーションプログラム】(予算2000万円)と、財団の将来のプログラム開発に資するような案件や他組織と共同で行うプロジェクトを対象とした【イニシアティブプログラム】(予算2300万円)との2つからなるプログラムも実施しています。



財団法人 トヨタ財団

会長：豊田達郎

理事長：遠山敦子

設立以来の助成実績累計：7,131件  
(2009年3月31日現在)



THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.2